

平成16年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

2005.6

大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会

中國社會科學院
經濟研究所

例 言

1. 本報告書は平成16年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成17年度国庫補助事業により作成した。
2. これらの調査は大阪市教育局が財大阪市文化財協会に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は財大阪市文化財協会 田中清美の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育局文化財保護課において行った。

目 次

I 北 区

西天満1丁目所在遺跡発掘調査 (WT04-2) 報告書	3
西天満3丁目所在遺跡発掘調査 (WT04-1) 報告書	7

II 中央区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW04-3) 報告書	13
島之内2丁目所在遺跡発掘調査 (SI04-1) 報告書	19

III 天王寺区

四天王寺旧境内遺跡発掘調査 (ST04-1) 報告書	23
堂ヶ芝廃寺遺跡発掘調査 (DS04-1) 報告書	29

IV 旭 区

森小路遺跡発掘調査 (MS04-2) 報告書	39
------------------------------	----

V 阿倍野区

松崎町2丁目所在遺跡発掘調査 (MZ04-1) 報告書	47
-----------------------------------	----

VI 住吉区

遠里小野遺跡発掘調査 (OR04-2) 報告書	55
帝塚山東遺跡発掘調査 (TE04-2) 報告書	59

1 北 区

西天満 1 丁目所在遺跡発掘調査 (WT04-2) 報告書

- ・調査箇所 大阪市北区西天満 1 丁目 47-3・39-17
- ・調査面積 80㎡
- ・調査期間 平成 16 年 11 月 4 日～平成 16 年 11 月 11 日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美・市川創

〈調査に至る経緯と経過〉

西天満 1 丁目所在遺跡は、堂島川のすぐ北側に立地し、阪神高速道路大阪守口線を挟んで東側には、天神橋遺跡が所在する。

今回、当地で建設工事が行われることとなり、それに先立ち平成 16 年 10 月 10 日に試掘調査が実施された。その際、豊臣期と推定される整地層が検出され、またそれより下位の地層も良好に残存していることが確認された。当地は既知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外となるが、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、上記の試掘成果に基づき、本調査を行うことになった。調査にあたっては、重機により現地表下 2.7m までを除去し、それより下位については人力によって掘削を行い、遺構の検出作業および記録作業を行った。また、表土掘削中に検出した建物の基礎を完全に除去することは困難であったため、当初 100㎡を予定していた調査区を 80㎡に縮小した。調査の最終段階には重機による地層の確認を行い、11



図1 調査地周辺図

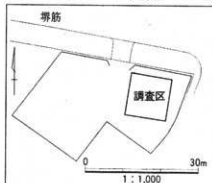


図2 調査区配置図

月11日には埋戻し作業を含む現場での調査をすべて終了した。なお、本報告で使用した標高はTP値、方位は図1のみが座標北、それ以外の図は磁北である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

本調査地での層序は以下の通りである。

第0層：近現代の整地層である。層厚は最大で150cmある。

第1層：暗オリーブ褐色を呈する砂～シルトからなる整地層である。層中にはSE101のほか、埋土に焼土を多く含む火事後の整地に伴うと考えられるSK101などが掘込まれている。このうちSE101埋土最下層から三島手の大鉢などが出土していることから、第1層は少なくとも18世紀以降に属する。層厚は最大で35cmある。

第2層：暗灰黄色細粒砂を主体とする整地層である。2a・2b層に細分した。2a層はシルトと細粒砂が互層状に堆積し、下面には鉄分が顕著に沈着している。2b層は比較的粒径の揃った細粒砂からなり、上部には粘土の偽礫を含む。重機によって掘削を行ったため詳細はわからないが、17世紀に属すると思われる肥前陶器の口縁部片が出土している。層厚は最大で94cmある。

第3層：オリーブ褐色中～粗粒砂からなる整地層である。下部ではシルト～粘土の偽礫を多く含む。層中から、少量ではあるが瀬戸・美濃焼の天目茶碗6や青花など、主として16世紀代に属する遺物が出土した。層厚は最大で36cmある。

第4層：粘土および粗粒砂からなる整地層である。第5層を掘込んで形成されている。黒褐色シルト～粘土を主体とする4a層と、同じく黒褐色粗粒砂を主体とする4b層、そして暗灰黄色中粒砂混りのシルトからなる4c層に細分した。4b層の下部では、シルト質粘土の偽礫を多く含む。上面で敷地境などの可能性があるSX401を検出した。本層では、須恵器片のほか、土師器2・3、瓦器4、土錘5など、平安時代～中世前期の遺物が少量出土した。層厚は最大で74cmある。

第5層：オリーブ黒褐色細～中粒砂からなる整地層である。粘土の偽礫を多く含む。奈良時代～平

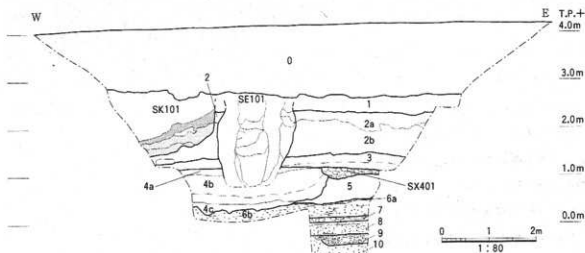


図3 調査区北壁断面図

安時代前期に位置づけうる高杯1のほか、須恵器・瓦器の細片が出土した。層厚は最大50cmある。

第6層：6a層と6b層に細分した。6a層は黒色シルト質粘土層で、植物遺体を多く含む。6b層は灰色中粒砂混りシルト～粘土である。炭を少量含む。6b層は淘汰が悪いが、わずかにラミナ構造が観察され、ともに水成層である。西へ向かってわずかに傾斜していた。層厚は最大で34cmある。

第7層以下は重機による深掘りで確認した。いずれの層準も水成層であり、第6層と同じく西へ向かってわずかに傾斜する。遺物は第8層からのみ出土した。

第7層：黒褐色中粒砂混りシルトである。層厚は10cmある。

第8層：黒褐色シルト混り細～中粒砂層である。古代に属する須恵器鉢の口縁部細片が出土した。層厚は36cmある。

第9層：青灰色中～粗粒砂層である。ラミナ構造を顕著に観察することができる。層厚は最大で20cmある。

第10層：暗褐色シルト混り粗粒砂層である。第9層によって削られるが、最大で40cm以上が残存していた。

2. 遺構と遺物

SX401(図3・4) 第4層の上面で検出した、南西-北東方向に延びる溝状の遺構である。長さは3.3m以上、幅1.4m、検出面からの深さは0.2mあった。埋土は上下に二分で

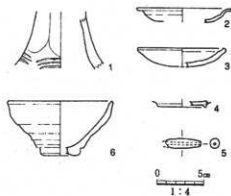


図4 包含層出土遺物
第5層(1)、第4層(2～5)、第3層(6)

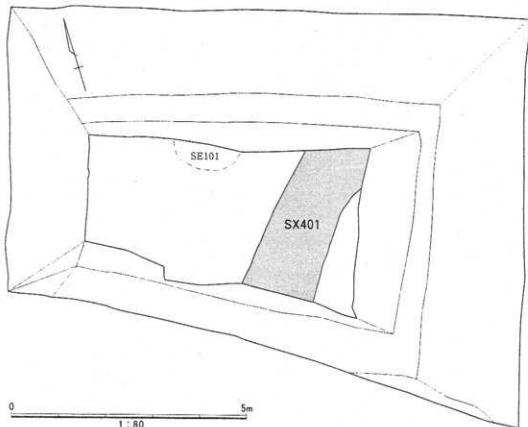


図5 第4層上面の遺構

き、上層は暗灰黄色中粒砂層で、大型の粘土からなる偽礫を非常に多く含む。下層は灰色中粒砂層であり、上層と同じく粘土の偽礫を多く含む。上層・下層とも、下位には存在しない粘土の偽礫を含むことから、人為的な埋戻し土と考えられる。遺構の性格としては、敷地境などの可能性を考えることができよう。埋土からは瓦器の細片や瓦片が出土した。遺構中、第3・4層からの出土遺物が少ないために、遺構の時期を明確にすることは困難であるが、天満堀川の直近という立地環境から、豊臣期に属する遺構である可能性があろう。

〈まとめ〉

今回の調査地から東方へ150mの地点に位置し、地形的に高いTJ00-2次調査では、鎌倉～室町時代を中心として、古墳時代～江戸時代に至る各時代の遺構・遺物が出土している。その南方45mで行われたTJ94-4次調査でも、豊臣後期の遺構が検出されているが、大川に向かう傾斜が認められ、遺構・遺物の出土は顕著ではない。一方、今回の調査地の北方360mで行われたWT04-1次調査では、低湿地状の堆積が確認され、豊臣期の遺構は検出されなかった。本調査においても、第6層以下は水成層であり、積極的な開発が行われるのは、時期は明確にしなかったが、第5層が形成される以降の時期である。WT04-1・2次調査の成果は、天満堀川(現在の阪神高速大阪守口線)が開削された豊臣期においても、地形的に低い天満堀川より西側では積極的な開発が行われなかった可能性を示唆し、重要であると考えられる。ただし、天満地域の開発については、天満本願寺跡・天神橋遺跡など天満堀川以東の地域における成果が蓄積されている反面、天満堀川以西での調査はまだ端緒のつたばかりである。今後の成果が期待される。

北・東壁地層断面
(南西から)



深掘り部分の地層
(南西から)



SX401検出状況
(西から)



西天満3丁目所在遺跡発掘調査(WT04-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市北区西天満3丁目38-1・38-3・39-5・44-1・12-6
- ・調査面積 49㎡
- ・調査期間 平成16年6月7日～平成16年6月14日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、大庭重信

〈調査に至る経緯と経過〉

西天満3丁目所在遺跡は天神橋遺跡の西側に位置する(図1)。付近には古代の東大寺新羅江庄あるいは安曇江庄、中世の渡辺津が存在したことが推定されており、調査地から南東に約500mの天神橋遺跡側では、古墳時代後期、奈良～室町時代の遺構・遺物が見つまっている(TJ00-2次調査)。また、天神橋遺跡は、近世になると城下町天満や大阪天満宮の門前町として発展してきた。

先行して行われた試掘調査の結果、古代・中世の遺物包含層の存在が確認され、新たに「西天満3丁目所在遺跡」と命名され、調査が行われることとなった。敷地の東半にH杭で土留めを行い、現地表下3mまでを掘り下げ、そこから2mまでの深さが調査の対象となった。

平成16年6月7日から調査を開始した。まず7m×7mのトレンチを設定し(図2)、人力で掘り下げを進めた。調査開始面に近世の遺構が一部残存しており、瓦溜や石列を検出した。調査日程の都合上、近世の遺構については簡易な記録に止め、試掘で確認された古代・中世の遺物包含層を目的に掘り下げていった。調査開始面から約1m下に、試掘時に包含層とされた黒褐色土層(第4層)を確認し、サブトレンチを設けて以下の地層を精査したところ、湿地状の堆積層であることが判明した。そのため、主目的



図1 調査地位置図

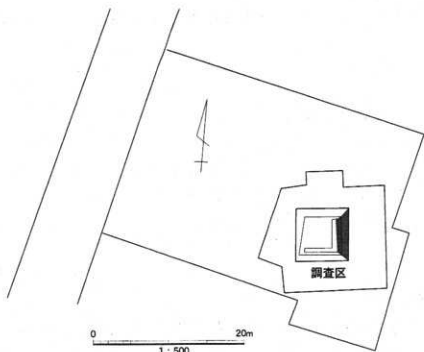


图2 調査区配置図

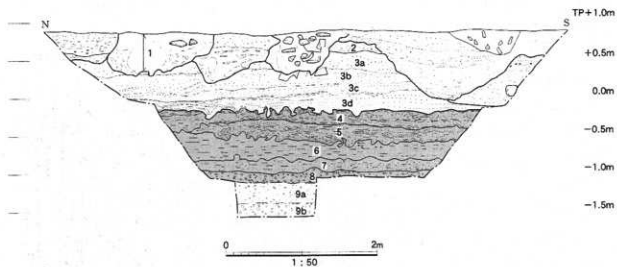


图3 東壁地層断面図

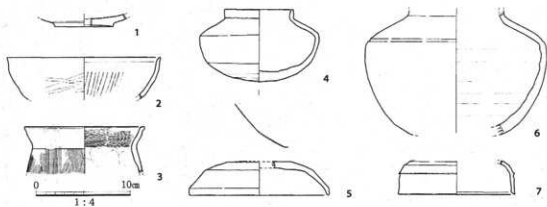


图4 出土遺物

(1:第4層, 2~4:第6層, 5・6:第7層, 7:第8層)

を地層の観察・記録と遺物採集に切替え、6月14日まで調査を実施した。

(調査の結果)

1. 層序(図3)

調査区東壁断面で地層の観察を行い、TP+0.9～TP-1.6mの地層を第1～9層に区分した。

第1層：壁面に残る近世の遺構埋土を第1層とする。17世紀後半の陶磁器・瓦を多く含む。

第2層：オリブ褐色細粒砂～中粒砂からなる。下位の第3層上部が土壌化を受けたものである。層厚は15cmあった。

第3層：中粒砂を主体とし、層相から第3a～第3c層に区分した。第3a層は層厚40cmの黄褐色中粒砂層、第3b層は層厚10～15cmのオリブ褐色細粒砂層、第3c層は層厚10～30cmのオリブ褐色中粒砂層で、第3b・3c層はラミナが発達した水成層、第3a層は淘汰が良くラミナが観察できないことから、第3b・3c層の二次堆積による風成層と考えられる。第3b・3c層の古流向は南から北(S20°E～S30°E)であった。

第4層：黒褐色シルト～細粒砂からなり、有機質に富む。層厚は20cmあり、上端には炭の薄層が見られる。上面付近は凹凸が顕著であり、平面でも第3c層で埋まる直径10～20cmの円形の窪みが多く見られた。窪みは重複せずに密集して分布し、またヒトや動物の足跡痕跡は確認できない。第4層上面を中心に上下の地層が歪んでいることから、地震等によって生じたロードキャストであると判断できる[松田順一郎1994]。本層からは平安時代前期の緑釉陶器が出土した。

第5層：暗灰黄色シルト～中粒砂の互層からなり、層厚は15～20cmある。本層下半は特にラミナの乱れが顕著で、下面にも凹凸が見られる。

第6層：黒褐色粘土質シルトからなり、層厚は20～35cmある。上半には有機物の薄層が顕著に見られる。飛鳥時代の土師器・須恵器が出土した。

第7層：黒褐色シルト混り細粒砂～粗粒砂からなり、層厚は20cmある。上半は有機質に富む。飛鳥時代の土師器・須恵器が出土した。

第8層：黒褐色礫からなり、層厚は15cmある。下位の第9層とは漸移的で、第9層上部が土壌化を受けたものと考えられる。古墳時代中期の須恵器が出土した。

第9層：一部を深掘りして確認した地層で、第9a・9b層に区分した。第9a層は層厚25cmの緑灰色礫混り粗粒砂層、第9b層は灰色礫層で、層厚は17cmまで確認した。礫の重なりから古流向は東から西と推定される。

2. 出土遺物(図4)

第4層からは緑釉陶器の碗もしくは皿1が出土した。9世紀中葉のものであろう。

第6層からは土師器杯C2、甕3、須恵器短頸壺4が出土した。2は復元口径が16.2cmあり、外面にヘラミガキ、内面に放射状暗文が確認できる。3は外面ハケメ調整の小型甕である。4は完形品で底部外面にヘラ記号がある。第7層からは須恵器杯H蓋5、短頸壺6が出土した。6は瓦質の焼成である。第6・7層出土土器は7世紀前半のものであろう。

第8層からは須恵器杯蓋7が出土した。小片であるが、口径は12.2cmに復元できる。天井部と口縁部の境界、端部ともにシャープなつくりで、TK208型式に属するものであろう。

(まとめ)

今回の調査地は古代には湿地であり、期待された遺構を確認することができなかった。ただし、5世紀後半と7世紀前半の遺物が出土し、今後、周辺で当該期の遺構の発見が期待される。そのためには当地域における地形復元を進めていく必要がある。今回の調査では5世紀後半以前の砂礫層(第9層)が東から西の方向、9世紀中葉以降の砂層(第3層)が南から北の方向で堆積していることが判明した。天満砂堆や淀川三角州の地形発達に関する重要なデータとなろう。

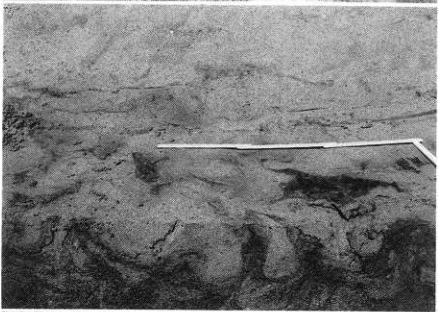
参考文献

松田順一郎1994、「足跡とは似而非なるロードキャストについて」：『東大阪市文化財ニュース』Vol.6.No.2、pp.1-5

調査区全景
(4層上面、西から)



3・4層で見られた
ロードキャスト



東壁地層断面
(4～10層)



II 中 央 区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW04-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区安堂寺町1丁目21-1の一部
- ・調査面積 127㎡
- ・調査期間 平成16年12月13日～平成16年12月21日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、宮本佐知子

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は難波宮跡公園の南西400mに位置し、これまでの周辺調査では難波宮期、豊臣氏大坂城期・徳川期の遺構が検出されている。西隣の調査(NW00-6)では前期難波宮の柱穴が南北に並んで検出され、東隣の調査地(NW00-20)でも古代の土壌等を検出した。また、両調査地にまたがって豊臣氏大坂城期か、さらに遡るかと思われる東西溝跡を検出している。

当該地は平成16年8月の試掘で、地山が高く残っていることが確認され、さらに11月に再試掘を行ない、12月13日から本調査を実施することとなった。調査区は幅2mで、十文字に設定した。しかし、重機で現代盛土を掘削したところ、全体に地山が高く、中央付近で古代の柱穴と、南辺で溝を検出した。そのために再度重機を入れて調査区を拡張し、遺構の広がり確認に努めた。調査は重機



図1 調査地位置図(1:2500)

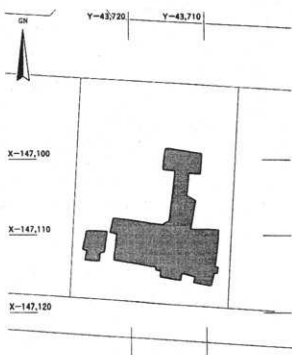


図2 トレンチ配置図(1:500)

掘削を行った後に人力で掘削し、古代と近世の遺構を検出した。12月21日に掘削・実測・写真撮影などの作業を終了した。

なお、図で使用した座標は旧来の日本測地系に基づいたもので、水準値はTP+値である。

〈調査の結果〉

1. 層序

第1層：現代の盛土層である。

第2層：黒褐色中粒砂層である。

第3層：灰褐色砂質シルト層で、調査地中央部に部分的に存在する。

第4層：明褐色細粒砂質シルト層で、当地域の地山である。

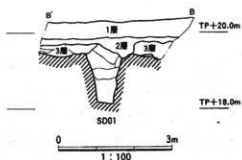


図3 基本層序とSD01断面図

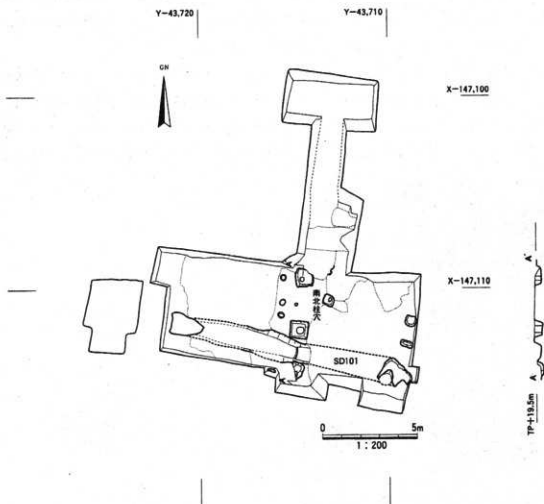


図4 古代検出遺構図

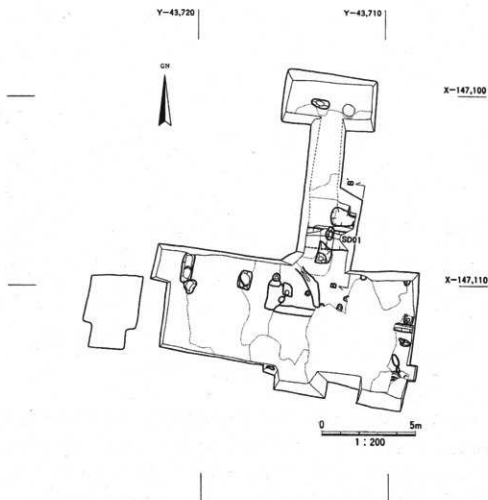


図5 近世検出遺構図

2. 遺構と遺物

大半の遺構は地山上で検出した。埋土の違いから黒褐色中粒砂のもの、褐色系のシルトや細砂を中心とするものに大きく分かれる。遺構の時期は前者が近世後半以降で、後者は主に古代と近世初頭以前である。古代の遺構は溝と柱で、近世初頭の遺構はいくつかのビットと溝を検出した。

1) 遺構

a. 古代の遺構(図4)

SD101 調査地の南辺で検出した東西方向の溝で、近世に攪乱を受けているが最大幅約1.3m、最大深さ0.45mで、方位は西で北に振っている。溝内に水が流れた痕跡はなく、一気に埋め戻されている。底は東から西に傾斜しており、途中で約0.15mの段になるところがある。調査地の東端では地山は高いが、溝は認められない。溝の西側は西隣の調査地で検出した溝に続くと思われる(図6)。

南北柱穴 ほぼ真南北に並んだ3基の柱穴である。北と中の柱穴は一辺が0.89~0.95mの正方形に

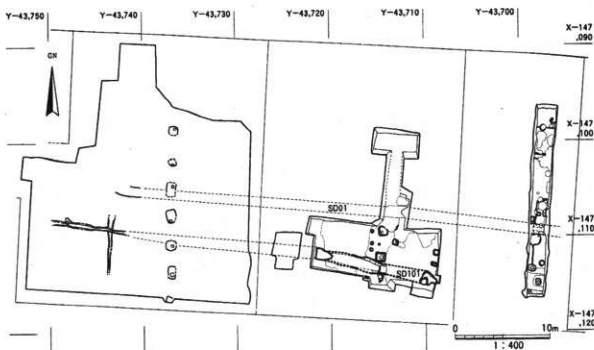


図6 周辺検出遺構図

近い形で、埋土は暗灰褐色砂礫混りシルトである。北の柱痕跡は直径0.23m、中柱は0.33mで、両柱痕跡間の間隔は2.8mである。南の柱穴は近世に攪乱を受けて約半分しか残存していないが、北側2基とは形も方位も異なっている。南柱の方位は北でやや東に振っており、柱穴は0.91×0.74m、柱痕跡は直径0.24mで、埋土は灰茶褐色砂質シルトである。中柱との柱間寸法は2.4mである。この柱穴はSD101の埋土の上から掘り込まれている。柱穴の東・西側共に近世以降に攪乱を受けており、これらの柱穴が建物の一部であるか否かは明らかでないが、埋土や形状の違いから北2基と南の柱穴は別の建物の可能性がある。この柱穴の北延長上のトレンチでは、地山が高いにもかかわらず、古代の柱穴は確認できなかった。

南北柱穴3基を一つの塀や橋とすると、北で西に振った難波宮の方位に近い。また、今回検出の南北柱穴の北1,620mの延長上には、NW89-1調査で検出した塀SA301がある。SA301は難波宮内の西方を区画する塀である。

ほかに古代に属すると思われる小ピットを数箇所で見出したが、まとまりや遺物もなく、建物として組み合わせるものはなかった。

b、近世およびそれより以前の遺構(図3・5)

SD01 東西方向の溝で幅約1m、深さ約1.65mである。水の流れた痕跡はなく、粗粒砂で埋め戻されている。遺物はなく、本溝上から近世初頭の遺構が重なって検出されるので、遅くとも近世初頭には埋められているものと思われる。なお、両隣の調査でもSD01の延長部を検出しているため、この溝は東西45m以上にわたって続いていたことになる。

本溝上の上位付近には、整地土なのか、大きな遺構の残りなのか明らかでないが近世初頭の遺物

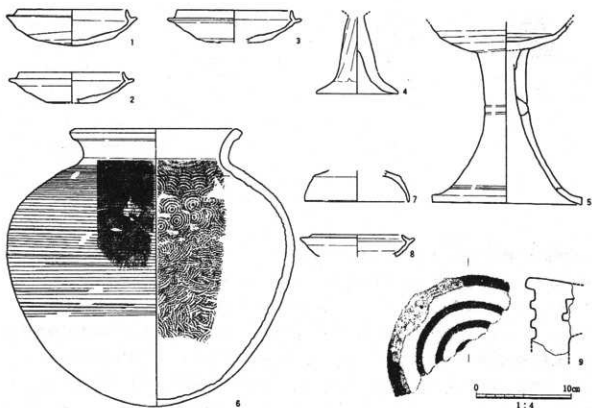


図7 古代の遺物

SD101(1~6)、中柱穴(7・8)、近世層(9)

を含む灰褐色砂質シルトの第3層がある。

2) 遺物(図7・8)

図7の1~6は溝SD101の中から出土した遺物である。1・2は須恵器の杯Hで、底部はヘラケズリ調整をしている。3も杯Hであるが、ヘラケズリをしていない。5は長脚2段高杯で、6はほぼ完形の小型甕である。須恵器には杯Hにケズリがあるものとなないものがある。4は土師器の高杯の脚部である。土師器は4の様な精製のものが少なく、多くは粗製で、ナデ調整の「難波型」である。これらの土器は難波Ⅲ古に位置付けられ、7世紀初頭に属する一括資料である。SD101は前期難波宮が造営されるころに埋められた溝の可能性が高い。また、溝内の直上の近世の地層から難波宮の重圍文軒丸瓦6008型式の破片9が1点出土した。

7・8は須恵器で、杯の蓋と身の破片である。南北柱穴の中柱穴から出土した。

図8は第3層出土の遺物で、10・11の青花や12・13・14の土師皿と、突帯をもつ土師器の脚部15がある。このうち脚部15は豊臣大坂城惣構内からも出土例があり[大阪市文化財協会 2002]、近世初頭に使われていたものと思われる。当調査地は豊臣氏大坂城期には、惣構内に位置すると推定でき、これらはそこで使われていたものであろう。

〈まとめ〉

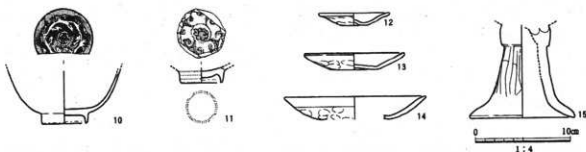


図8 第3層出土近世遺物

本調査では難波宮が造られる以前の溝SD101を検出した。この溝は調査地の南東端周辺から始まって、西に向かって傾斜している。敷地南東部に何らかの区画の変換点というか、出入り口や通路のようなものがあった可能性が考えられるが、今回の調査地内では明らかにできなかった。

また、その後造られた南北柱穴は前期か後期かは明らかではないが、難波宮の時期の可能性が高く、西隣の敷地で検出した南北橋列とともに、難波京内の開発を考えるうえで貴重な資料となった。一方、東西45mも続く深い溝は、時期は決めたいが、豊臣大坂城に関係するものか、それ以前の大坂本願寺に関係するものかなど、戦国時代終わり頃から豊臣期大坂城の上町台地上での区画を考える上で重要な鍵になるものと思われる。

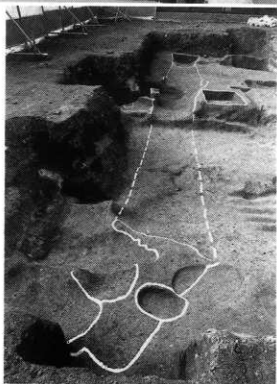
〈参考文献〉

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2002『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.46

調査地全景
(西から)



SD101全景
(東から)



SD101とSA101
(南から)



島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI04-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区島之内2丁目1-1
- ・調査面積 約49㎡
- ・調査期間 平成17年3月23日～平成17年3月31日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美・岡村勝行

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は東横堀川の西70mに位置する。この度、建物の建設工事(大規模開発)に際して、平成17年3月9日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約2.3mで近世前期以前に遡る可能性のある遺構面が見つかったため、本調査を行うことになった。

調査は平成17年3月23日から開始した。調査地中央で7m×7mの調査区を設定し、重機によって表土および近・現代層、江戸時代の盛土を地表下約2.0mまで掘削した。調査区の約半分は現代の擾乱が地山まで及んでいたため、西壁および南壁近くで遺構の検出および記録作業を行った。

〈調査の結果〉

1. 層序

本調査地の層序は以下の通りである。

第1層:現代の地層である。旧建物の基礎が含まれる。

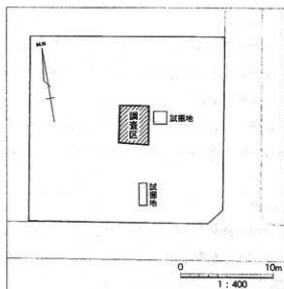
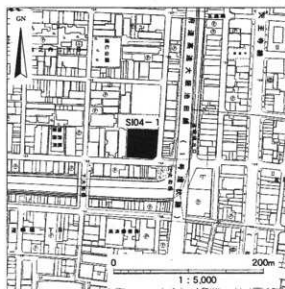


図1 調査地位置図

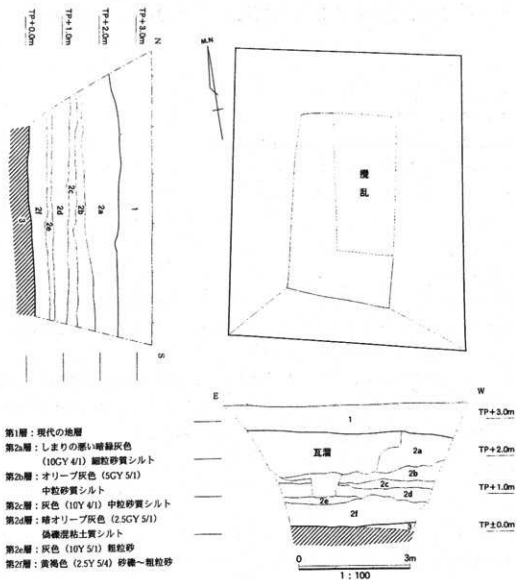


図2 調査区平・断面図

第2層：江戸時代の盛土である。a～fに細分され、第2e層からは、19世紀代の陶磁器・瓦が出土した。
 第3層：地山である。中粒～粗粒砂の水成層である。

2. 遺構と遺物

試掘の所見で、遺構面の可能性が指摘された第2e層上面を検出したが、生活痕跡は確認できなかった。盛土の境界面と考えられる。第2d層からは、18～19世紀代の伊万里・常滑焼・丹波焼・瓦が出土した。

(まとめ)

今回の調査は当遺跡で行なった初めての本格的な調査であり、東横堀川に近い今回の調査地点では19世紀以降に開発が始まった状況が確認された。大阪の都市の発展、この地域の開発時期を検討する上で基礎となるデータが得られたと言えよう。

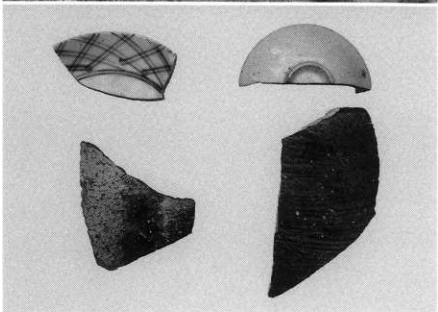
調査地の状況
(南西から)



地層の状況
(北東から)



2d層出土遺物



Ⅲ 天王寺区

四天王寺旧境内遺跡発掘調査（S T04-1）報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区四天王寺1丁目74-3・74-4
- ・調査面積 50㎡
- ・調査期間 平成16年4月5日～平成16年4月9日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、辻美紀

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、現在の四天王寺と谷町筋に挟まれた南北に細長い土地区画の一角に位置する。この付近では、大江小学校の建替えに伴う調査(ST85-1次)以来、継続的に発掘調査が行われてきた。調査地の南側に隣接するST88-9・89-2・89-5次調査地では、中近世の遺物包含層が良好に残っており、井戸や溝、あるいは土壌から大量の瓦や土師器皿に混じって、龍泉窯産の青磁や常滑・渥美・備前産の陶器等が出土した。また、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物も見つかっており、古代から近世に至るまで連続と土地利用が行われてきたことが明らかになっている。

今回、この地に高層集合住宅が建設されることになり、それに先立って平成16年12月16日と平成

17年2月24日の2回に渡り大阪市教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、いずれの調査においても古代から中世に位置づけられる遺物包含層が確認されたことから、本調査を実施することになった。調査地の西半は既設建物に伴う地下室で、古い地層が削平されていることが事前にわかっていたため、東半分に調査区を設定した。調査は近・現代客土を重機で掘削し、それ以下を人力で掘削する予定であった。しかし、以前の建物基礎ならびに解体工事によって、調査地の大半が地山直上まで改変を被っており、ほとんど遺物包含層が残存しないことが重機掘削時に判明した。そのため、地山直上で遺構・遺物の検出に努めることになった。

なお、調査に用いたレベルはT.P.値で、図に示す方位は磁北である。

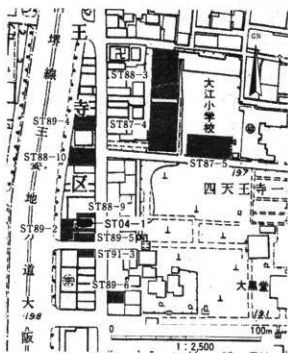


図1 今回の調査地と周辺の既往調査

〈調査の結果〉

1. 層序(図2)

東壁および南壁で確認できた地層は以下のとおりである。

第0層：既設建物の基礎解体時に生じた現代盛土で、調査区の大部分で地山(=第4層)の直上まで達する。層厚は約100cmである。

第1層：東壁中央部と南壁西部で確認した近世の盛土層で、褐色の中～粗粒砂からなる。

第2層：中世の遺物包含層である。基本的に遺構に伴うもので、a～e層はそれぞれSK01・02・06・10・SD01の埋土に当たる。

第3層：古代～中世初めの遺物包含層で、含礫オリーブ褐色シルト質中粒砂からなる。調査地の北半に点在し、最も残りのよい個所では層厚が30cmに及ぶ。出土遺物には瓦器・土師器・須恵器・瓦のほか、灰釉陶器がある。

第4層：含礫明黄褐色シルト～中粒砂の地山層で、上町台地の構成層に当たる。調査区内ではTP+19.2m付近で検出される。

2. 遺構と遺物

1) 奈良・平安時代の遺構と遺物(図2～4)

周辺調査では奈良時代の遺構が見つかるが、今回の調査区では地山が削り取られた部分が多く、明らかに当該期の遺構といえるものは確認できなかった。遺物は、奈良時代から平安時代にかけ

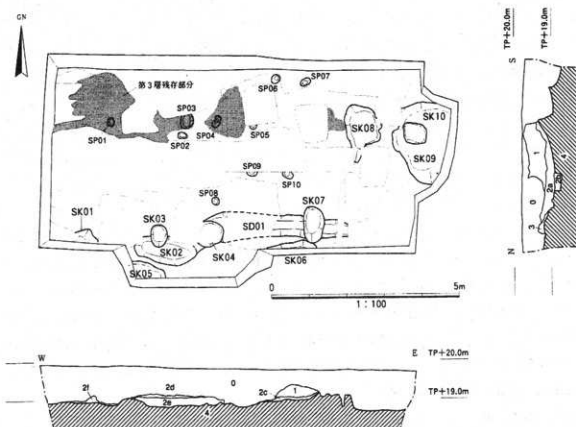


図2 東壁・南壁断面図ならびに地山上面検出遺構平面図

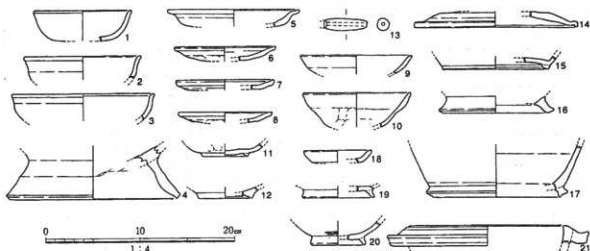


図3 第3層出土遺物実測図

ての土器や瓦が第3層から出土した。土師器には杯C1～3・鉢に付随すると思われる高台4・皿5～9・椀10～12・羽釜21があるほか、土師質の土錘13も見られた。1～3は内外面ともナデ調整で暗文はなく、口縁端部は外側へ丸く肥厚する。これらは奈良時代後半～平安時代初めのものと考えられる。5～8はいわゆる「て」の字状の口縁部をもつ皿である。薄手で口縁端部の折返しが顕著なもの5から、厚手で折返し線状に退化したもの8まで多様である。9は口縁端部を肥厚させない皿で、口縁部はわずかに稜をなしている。椀は断面三角形の貼付高台をもつ10と、高台をもたない11・12がある。椀・皿の年代は、佐藤編年の平安Ⅱ期新～Ⅳ期中段階(10世紀半ば～12世紀前半)に位置づけられる[佐藤隆1992]。21は口縁部直下に短く外反する鈎がつく。平安京Ⅲ期古段階(=10世紀中葉)の資料に類似がある[古代の土器研究会1993]。須恵器には杯B蓋14・同身15・壺の高台16・17がある。これらは奈良時代の終わりから平安時代初めの年代が与えられる。18は瓦器の小皿、19・20は瓦器椀で、佐藤編年の平安Ⅳ期古～中段階(=11世紀後半～12世紀前半)に相当すると思われる。また、図化しなかったが、凹面に縄目のタタキが施された平瓦が数多く見られた。

平安時代の遺構には、地山上面で検出した柱穴SP01～10がある。いずれも掘形の平面形は円形である。出土遺物には土師器・須恵器・瓦・瓦器があるが、大部分が細片で図化できたものはわずかである(図4)。22と23はSP03から出土した。22は瓦器椀である。高台は断面が三角形のしっかりしたもので、内底面には斜格子状の暗文がていねいに施されている。平安Ⅳ期中段階に相当する。23は蓮華文の軒丸瓦で、外区に巡らされた三葉状の文様(=雲文または槿状文)が特徴的である。平安時代前期の無子葉弁八葉蓮華文軒丸瓦[出口常順・藤沢一夫1986]に類似するが、蓮弁の上に2本の直線が後補されており、年代は下る可能性がある。24は土師器の椀の高台、25は土師器の皿でそれぞれSP04とSP09から出土した。24は平安Ⅲ期新段階、25は平安Ⅳ期新段階に位置づけられる。

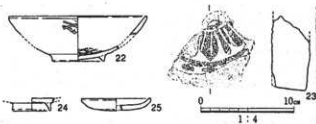


図4 SP08～11出土遺物実測図

22・23 SP03、24 SP04、25 SP09

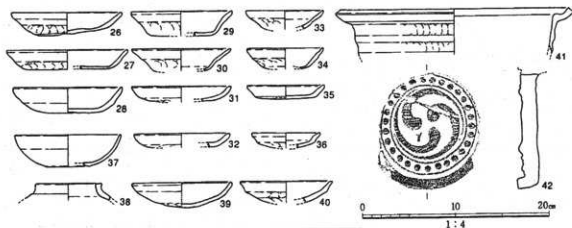


図5 SK02出土遺物実測図

2) 鎌倉・室町時代の遺構と遺物(図2・5～7)

当該期の遺構としては、複数の土壌(SK01～10)と1条の溝(SD01)がある。土壌は東・南壁に沿うように分布する。本来の規模は上部が削平されているためわからないが、平面形は円形に近いもの(SK03・04・09)と楕円形のもの(SK02・05～06)に分かれる。遺構の切合い関係では、前者が後者を切ることがわかっている。SD01は調査区の南部で検出した溝で、土壌群に先行する。幅は0.6m、深さは残りのよい部分で約0.4mで東西向きをとる。埋土の下部は水成の粘土からなる。

これらの遺構から出土した遺物の大半は13～14世紀のものであるが、SK09のように15～16世紀の遺物を含むものもある。ここでは、比較的まとまった量の遺物が出土したSK02-07-09-10・SD01の資料を提示する(図5～7)。

SK02からは土師器の皿26～36・羽釜のほか、瓦器の椀37・壺38・椀39-40、瓦質土器の鍋41、瓦42、焼締陶器の壺などが出土した。土師器の皿は法量で大小二種類ある。形態や調整方法を見ると、①体部にユビオサエを多用し、口縁部が外反するもの26・27・29・30・33・34、②無稜で口縁部が内湾して立ち上がるもの28・31・32、③有稜で口縁部に強い回転ナデを施すもの35・36など数種類に分けることができる。瓦器椀39・40は高台がなく、暗文も見られない。瓦質焼成の鍋はユビオサエで調整した体部に受口状の口縁部がつくもので、京都型と呼ばれるものである。42は巴文の軒丸瓦で外縁の幅が狭く、珠文帯の外側圏線を有するものである。ほかに瓦は丸瓦・平瓦・軒平瓦がある。これらの出土遺物は14世紀中ごろから後半の年代が与えられる。

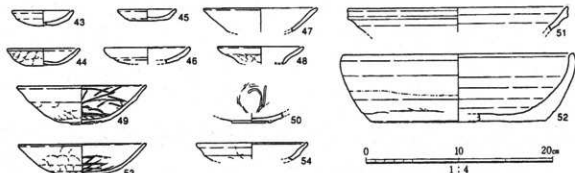


図6 SD01・SK07出土遺物実測図

43～52 SD01、53・54 SK07

SD01からは土師器皿43~48、瓦器碗49・50、備前焼の播鉢51と鉢52、瓦などが出土した。土師器の皿は有稜で口縁部が短い43・45・46、無稜で王縁状の口縁端部をもつ44、口径がやや大きく口縁部が直線的に伸びる47、いわゆるヘソ皿48など数種類がある。瓦器碗49・50は断面半円形の退化した高台をもつ。備前焼播鉢51は口縁端部の断面形が三角形で上下に肥厚しない。これらの遺物の年代は13世紀後半から14世紀中ごろと考えられる。SD01の上位のSK07からも瓦器碗53や土師器皿54が出土したが、遺物からは時期差は認められなかった。

SK09からはコンテナバットで4箱分の遺物が出土した。瓦72~74が大部分を占めるが、それ以外

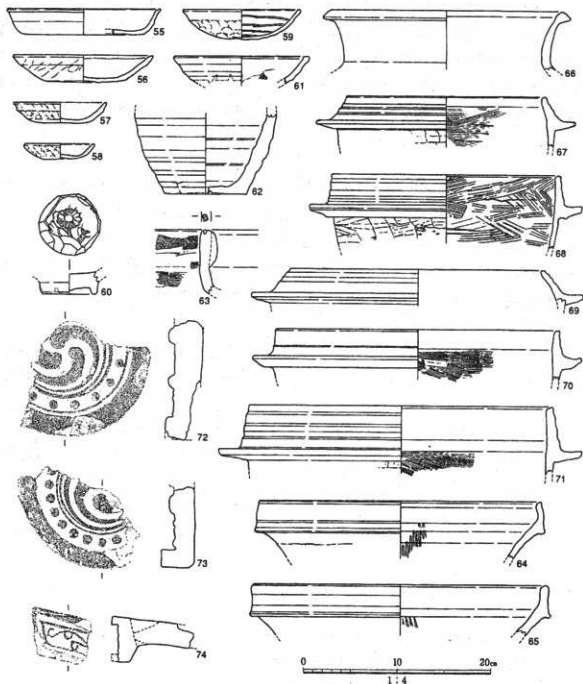


図7 SK09・SK10出土遺物実測図

59 SK10、それ以外はSK09

に土師器の杯55・皿56～58・羽釜、瓦器碗、中国製磁器碗60、古瀬戸の卸皿61、備前焼の壺62・甕63・播鉢64・65、須恵器甕66、瓦質土器の羽釜67～71・甕・火鉢などが出土した。55は奈良時代終わりから平安時代初めにかけての杯C、56～58はユビオサエを多用した皿でSK02の①に類似する。59はSK09の下で検出した方形の土壌SK10から出土した瓦器碗である。59の年代は14世紀と考えられることから、土師器皿も元来はSK10に伴うものであった可能性がある。60は龍泉窯産の青磁碗で、内底面に片彫りの草花文が見られる。64・65は備前焼播鉢の口縁部で、大きく肥大した端部の下端は外側へ突出する。瓦質土器の羽釜は口縁部が内傾する67・69と、直線的に立ち上がる68・70・71がある。軒平瓦の瓦当文様はすべて巴文であるが、外縁の幅が狭く珠文帯外側に圏線をもつもの72のほか、外縁が突出し圏線をもたないもの73が加わっている。74は唐草文軒平瓦で、唐草の端が巻込んで円をなすのが特徴である。瓦の大部分は平瓦が占めるが、その中には縄目や格子目のタタキを施した古代の瓦も含まれる。丸瓦にはコピキB手法を用いたものが見られる。以上から、SK09の出土遺物の年代はやや幅があるが、15世紀から16世紀のものが主体を占めていると判断できる。

〈まとめ〉

今回の調査区は、既設建物の基礎とその撤去作業で大きな改変を被っており、地層の残りは非常に悪かった。しかし、断片的に残った遺物包含層や遺構を検討した結果、古代から中世にかけての当地における土地の利用について、ある程度の情報を得ることができた。

①奈良時代から平安時代にかけての遺物を含む地層(=第3層)が調査区北部に残存し、その下で柱穴を検出した。第3層は古代の瓦を多く含んでおり、瓦葺き建物が調査地付近に存在した可能性が考えられた。

②土師器皿や瓦器碗などの遺物を多く含む、鎌倉時代終わりから室町時代の初めにかけての土壌が複数見つかった。土壌はある程度規則性をもって掘られており、当時の土地区画を反映していると考えられる。

③室町時代の終わりの土壌からは大型の瓦のほか、日本各地や中国から搬入された陶磁器が出土した。このことは、調査地付近で陶磁器等の流通が活発に行われていたことを示すとともに、大規模な建物をかまえるような基盤が存在したことが想定される。

これらの知見は既調査の成果を補強することになり、四天王寺西側の土地利用の変遷を考える上で新たな材料となると考える。今後、周辺での調査が進み、より広い範囲での景観・社会復元が進むことが望まれる。

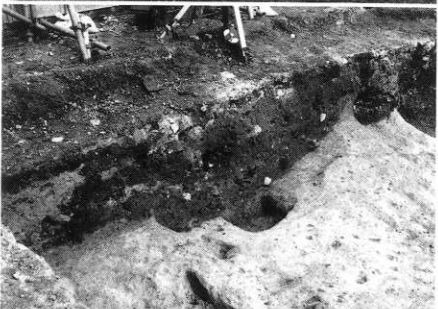
参考文献

- 佐藤隆1992 「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告』V 大阪市文化財協会
古代の土器研究会1993 「古代の土器2 都城の土器集成」II
出口常順・藤沢一夫監修1986 『四天王寺古瓦集成』、p.22

調査区完掘状況
(西から)



SK09・10断面
(東壁、北西から)



SD01断面
(西から)



堂ヶ芝廃寺遺跡発掘調査(D S04-1) 報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区堂ヶ芝丁目1丁目42-1-46-30
- ・調査面積 40㎡
- ・調査期間 平成17年3月7日～平成17年3月12日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、平田洋司・杉本厚典

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は観音寺の境内に位置する。観音寺周辺は古代の瓦が散布していることに加え、かつては塔心礎と考えられる巨大な礎石もあり、堂ヶ芝廃寺として古代寺院の推定地となっている。また、細工谷遺跡の発掘調査で「百済尼」・「尼寺」と記した墨書土器が出土し、「百済尼寺」の存在が想定されたことから、堂ヶ芝廃寺はこれと対になる「百済寺」であった可能性が高まっている。

周辺ではこれまで2件の発掘調査(DS87-3・88-1次調査)が行われている。両調査地ともに、江戸時代以降の地形改変も著しく、寺院に係わる遺構は確認されなかったものの、奈良時

代の瓦が多数出土しており、近隣に古代寺院が存在した可能性を強めた。DS88-1次調査地の東に位置する今回調査地でも、事前の大阪市教育委員会による試掘調査の結果、古代瓦が多数出土したため、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成17年3月7日より開始した。重機による掘削は表土層のみとし、以下は人力による掘削を行った。途中、遺構検出・掘削・図化・写真撮影などの作業を適宜行い、3月12日に埋戻しなど旧状に復し、現地における作業を完了した。

なお、調査で使用した北は磁北であり、レベルはTP値である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

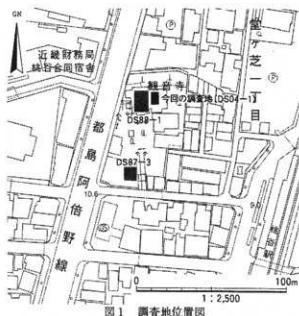


図1 調査地位置図

本調査の層序は以下のとおりである。

第1層：にぶい黄橙色(10YR7/4)細粒砂で構成される整地層であった。層厚は15～20cmで、調査区の全域に分布していた。

第2層：にぶい黄色(2.5Y6/2)細粒砂層で構成される整地層であった。層厚は8～10cmで、調査区の北西部に分布していた。

第3層：浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂層で構成される整地層であった。層厚は3～40cmで、調査区の全域に分布していた。

第4a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混りシルトで構成される整地層であった。黄色(2.5Y6/4)シルト質粘土よりなる

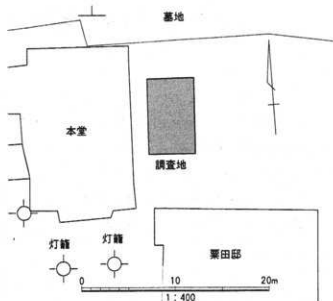


図2 トレンチ位置図(1:400)

5～30cm大の偽礫が含まれていた。層厚は5～30cmで、調査区の全域に分布していた。

第4bi層：にぶい黄橙色(10YR6/3)中粒砂混りシルト層であった。層厚は20cmで、調査区のはほぼ全域に分布していた。

第4bii層：にぶい黄橙色(10YR7/4)中粒砂混りシルト～細粒砂層であった。層厚は20～30cmで、調査区北西の高所部を除く全域に分布していた。下位層で見られた北西に高い地形は、本層によってほぼ平坦なものへと変化していることから整地層とみられる。SD03は本層上面に設けられた溝である。層中から18世紀の伊万里焼碗の破片が出土した。

第4biii層：浅黄色(2.5Y6/3)極細粒砂～シルト層で、調査区南西部の浅い落込み内に堆積していた。層厚は最大30cmで、5～20cm大の偽礫を多く含んでいた。

第4c層：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂とシルトの互層で、層厚は20～40cmであった。SD01内に堆積しており、ラミナが顕著であった。

第4d層：暗黄褐色(10YR5/3)シルト～黄色(2.5Y6/3)粘土層であった。層厚は最大40cmで、SD01内に堆積していた。後述するようにii～viの6層に細分される。

第5層：明黄褐色(10YR6/6)シルト～中粒砂で構成される地山層であった。

2. 遺構と遺物

(1) 第5層上面検出遺構

SD01の最下層の堆積であるiv層を除去したところでSK01を検出した。SK01は南北65cm、東西40cmの隅丸長方形で、深さは20cmである。埋土は第5層に由来するにぶい黄橙色シルト～細粒砂であり、明黄褐色粘土の偽礫を含んでいた。

調査区東半でSD01を検出した。SD01は幅250cm以上、深さ40cmであり、埋土はi～vi層に細分される。i層が第4c層、ii～vi層が第4d層に相当する。i層はラミナの顕著な水成層であった。南側で16

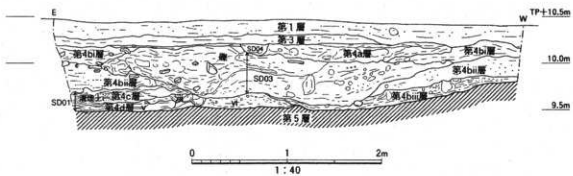
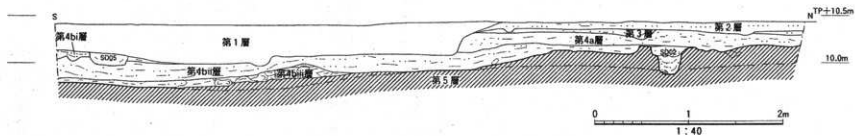
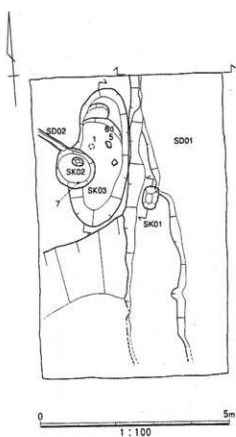
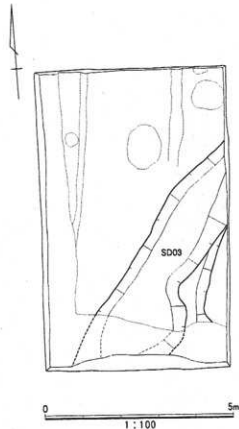


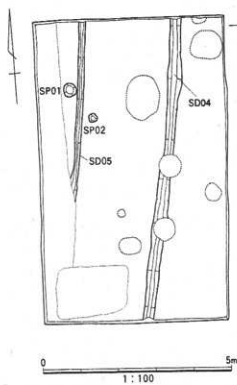
图3 西壁(上)·南壁(下)断面图(1:40)



第4bii基底面・5層上面



第4bii層上面



第4a層上面

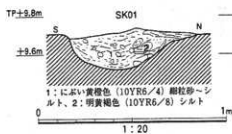
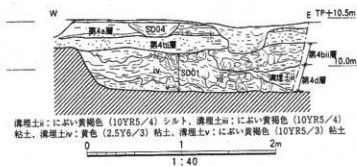


図4 第4a・4bii層上面・4bii層基底面・5層上面検出遺構平面図(1:100)・断面図(1:40、1:20)

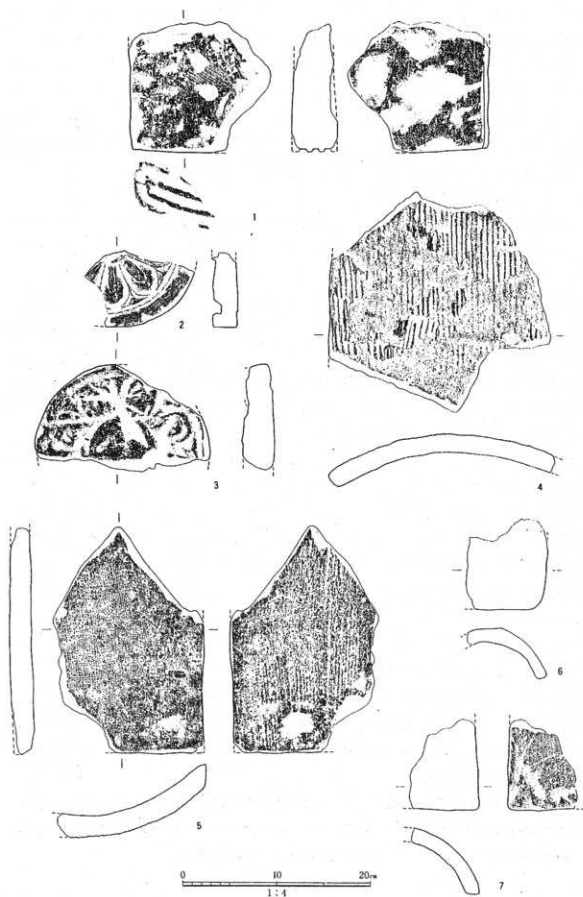


图5 出土遺物 7:SK02、1·5·6:SK03、2~4:第4a層中

cmの厚さで堆積していたが、北に向かって薄くなっていき、北壁から2m南の所で消滅していた。溝が廃絶した後の堆積とみられる。本層中から伊万里焼の細片が出土した。iii層は偽礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトからなり、10cm前後の明黄褐色粘土の偽礫が含まれていた。iv層は第5層に由来する黄色(2.5Y6/3)粘土層である。溝の西肩に沿って北半部に分布していた。iii・iv層とも人為的な埋め戻しの地層である。v層はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト層であり、微細な腐植物が含まれていた。水漬きの堆積とみられ、溝が機能していた時期の地層である。vi層はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト～細粒砂層であり、5cm大の明黄褐色の偽礫が含まれていた。

(2) 第4bii層基底面検出遺構と遺物

小溝SD02、土壌SK02・03を検出した。SD02は調査区北西部で検出した幅40cm、深さ30cmの溝である。北西から南東に延びており、南東でSK02と接する。埋土は灰褐色シルト質粘土でSK02のものと同じであり、同時に埋め戻されたとみられる。溝底の南辺側には木質が帯状に延びていた。

SK03は370×150cmの楕円形の土壌である。埋土は2層に分かれ、上層が細粒砂混りシルト質粘土、下層が5～10cm大の偽礫を含むシルト質粘土であった。下層から重圏文軒平瓦1、平瓦5、丸瓦6の他、近世の井戸杵瓦が出土した。

1は重圏文軒平瓦である。外縁とその内側の重圏文が繋がっている。凸面はナデで調整し、凹面には布目痕が部分的に残る。5は平瓦であり、凸面には縄タタキ、凹面には布目の痕が顕著である。6は丸瓦である。内外面とも磨滅しており調整は不明である。

SK02はSK03の埋土を除去して検出した直径90cm、深さ10cmの土壌である。溝の底には30cm×20cmの楕円形の小穴があった。埋土から凹面に布目痕をもつ丸瓦の破片7が出土した。

(3) 第4bii層上面検出遺構と遺物

調査区東半で溝SD03を検出した。SD03は幅180～250cm、深さ64cmであり、南西から北東方向に延びていた。埋土は細粒砂～シルトを主体とし、5～10cm大のシルト質粘土の偽礫をはじめ、礫や瓦片を多く含んでいた。溝の埋土にラミナは認められず、人為的に埋め戻されたとみられる。埋土から18世紀の伊万里焼碗の破片が出土した。

(4) 第4a層上面検出遺構と遺物

柱穴SP01・02と溝SD04・05を検出した。

SD04は幅15cm、SD05は幅40cmで、いずれも深さ10～16cmの溝である。互いに磁北から10°東に平行して延びる。埋土は浅黄色細粒砂～シルトであった。SP01は直径30cm、深さ31cmの柱穴で、直径10cmの柱痕跡が認められた。SP02はSP01の南東1mに位置する直径25cm、深さ10cmの柱穴で、直径9cmの柱痕跡が認められた。

また、第4a層からは古代の瓦が出土した。3は重弁蓮華文軒丸瓦である。中房には4個の連子が残る。蓮弁は輪郭線で表現されている。3は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は肉厚である。4は平瓦である。凸面に縄タタキが顕著であり、凹面の側縁付近には布目痕が残る。

〈まとめ〉

西に隣接するDS88-1次調査地に比べて密度は低いものの、7世紀後半から8世紀前半にかけて瓦が多数出土した。本調査地で出土した重圏文軒平瓦は圏線が側縁端部で外縁と繋がっており、これまでに堂ヶ芝廃寺で出土している重圏文軒平瓦の特徴と一致する。

寺院に係わる遺構の検出を調査目的の一つとしたが、古代の瓦は近世に埋め戻された溝や土壌、整地層に含まれるものがほとんどであり、奈良時代のもの特定することのできる遺構は認められなかった。しかし、SK01のように近世の溝に削られても残る遺構もあり、後世の開発が下位層の遺構を完全に破壊していないと推測される。今後の調査においても、寺院に係わる遺構の検出が期待される。

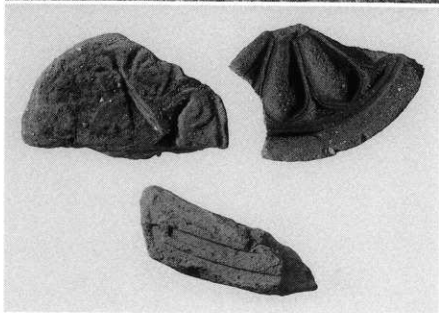
第4bii層基底面・
第5層上面検出遺構
(南から)



SK01断面
(東から)



蓮華文軒丸瓦(上)
と重圓文軒平瓦(下)



IV 旭 区

森小路遺跡発掘調査 (MS04-2) 報告書

- ・調査箇所 大阪市旭区新森5丁目11
- ・調査面積 16㎡
- ・調査期間 平成16年9月21日～平成16年9月24日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、平田洋司

1) 調査の経緯と経過

調査地は森小路遺跡の東北部に位置する。周辺ではこれまで多くの調査がなされており、弥生時代中期をはじめとして、古墳時代の遺構・遺物などが検出されている〔大阪市文化財協会2001〕。今回の調査地についても、事前に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、弥生時代と考えられる包含層が認められたため本調査を実施することとなった。

調査に先立ち、包含層上面である地表下0.5mまで掘削済みの子定であったが、北東部では敷地境に接して地表下1.0mまで掘削が及んでいた一方、それ以外については未掘削の状態であった。このため、調査開始時に調査区を再設定し、重機による再掘削を行った。重機による掘削は、包含層が一部しか遺存していなかったため、遺構埋土以外では後述の第5層上面までとし、以深は人力による掘削とした。掘削の排土はすべて場内に仮置きとした。途中、遺構検出・掘削・記録・撮影などを適宜行い、9月24日に現地における調査を完了した。



図1 調査地位位置図

図2 調査区配置図

なお、SK201出土の貝類については池田研の執筆による。また、図に示す北は磁北であり、レベルはTP値である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

第0層：調査開始直前に重機による攪乱を受けた地層である。

第1層：偽磔を多く含む現

代盛土層で、層厚は30cmある。偽磔のうち、黒褐色砂泥りシルトは弥生～古墳時代の包含層に由来するものと思われる。

第2層：暗灰黄色細～中粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は5～40cmある。基底部付近は凹凸が著しく下位層の偽磔を多く含んでいるのに対し、上部は淘汰がよい。出土遺物は弥生土器のみであるが、周辺の調査成果などから近世以降に相当すると考えられる。

第3層：下位の偽磔を含む黒褐色細粒砂質シルトからなり、層厚5cm程度で部分的に遺存する。遺物は確認できなかったが、弥生時代の包含層と考えられる。

第4層：黒褐色シルトからなり層厚5cm以下で部分的に遺存する水成層である。本層以下は部分的な掘削であるが遺物は出土しなかった。森小路遺跡のベースとなる地層と考えられ、弥生時代中期初頭以前の堆積と推定できる。

第5層：暗灰黄色シルト～細粒砂質シルトからなる水成層で、層厚は20cmある。

第6層：暗灰黄色～灰色を呈する細粒砂およびシルト質細粒砂の互層などからなる水成層で、層厚は40cm以上ある。東に下る堆積を示す。

ii) 遺構と遺物(図4～6、表1)

第3・4層が部分的にしか遺存しなかったことから遺構検出作業は第5層上面で行った。埋土および出土遺物から弥生時代と近世以降に二分しうる。遺構番号については弥生時代のものを200番台、江戸時代以降のものを100番台として記した。

a) 弥生時代の遺構と遺物

小穴 数基の小穴を検出した。径0.1～0.4mで検出面からの深さは0.15m未満と遺存状況は悪い。掘込み面のわかるものは第3層を切っている。埋土はいずれも第3層以下の偽磔を多く含む。柱痕跡が確認でき、柱穴と考えられるものもある。

土壌 調査区北東部にて土壌SK201を検出した。北は攪乱で失われ、東は調査区外に続くため本来の形状や規模は不明である。また、埋土直上まで攪乱されていたことから、掘込み面も明らかではな

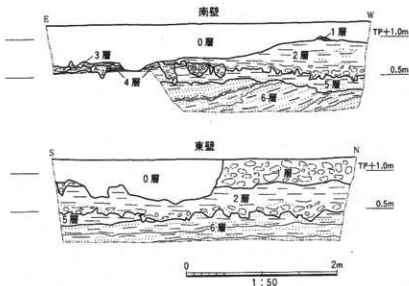


図3 地層断面図

い。土質や出土遺物から弥生時代の土壌と判断した。検出面からの深さは0.3mであるが、第3層上面が掘込み面とすると、深さは0.65mとなる。セタジミを中心とする貝を多量に含む特徴がある。底面には凹凸があり、埋土最下部は下位層の偽礫を多く含むことから、加工時の形成層と考えられる。上部は貝・炭を多く含み、互層状となる。埋土を洗浄した結果、セタジミを初めとする多量の貝類や魚骨・ウロコのほか、炭化米などが確認された。これらのことから、土壌の機能はゴミ捨て穴であったといえる。

土器としては弥生土器1~3が出土

した。1は鉢の口縁部で、8条1単位の拂描直線文を配する。直接接合しないが同一個体と考えられる破片が数点出土している。2は壺の底部、3はミニチュアの高杯である。これらの土器を含め小片が

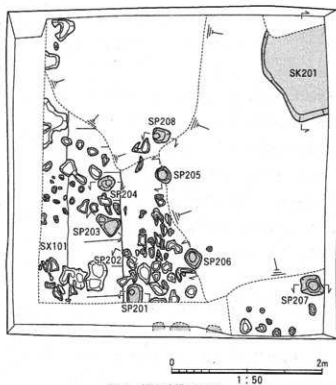


図4 検出遺構平面図
(トーンは弥生時代の遺構)

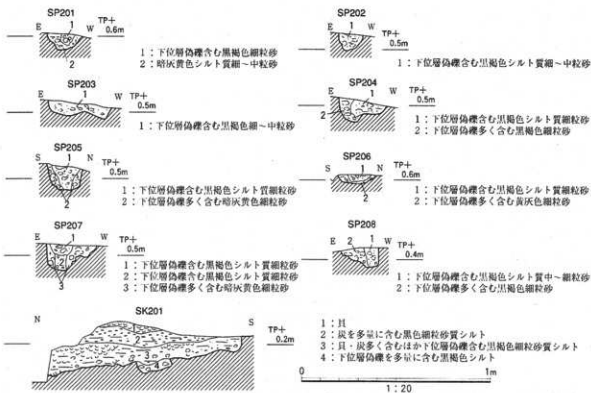


図5 遺構断面図

多いながらもすべて畿内第Ⅱ様式に位置づけられることから、土壌の時期は弥生時代中期前葉と考えられよう。

SK201出土の貝類 ここではSK201から出土した貝類の同定結果を報告する。同定作業には現生標本と図鑑〔吉良哲明1954・波部忠重1961・紀平肇ほか2003〕を利用して、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏より貴重なご助言を賜った。また、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

当遺構から出土した貝類は計189個体と少量である。残存状態は比較的良好で、ほぼ全量を取上げることができた。構成貝種については計9種にのぼるが、比率的にはセタシジミが90%以上と大半を占めている(表1)。セタシジミの計測値は殻高が25.1mm、殻長が24.1mmであった。

森小路遺跡は貝類を伴う弥生時代中期の遺構が多く検出されていることで知られており、これまでに15箇所調査で20種を超える貝類が出土している〔池田研2001〕。それらの資料の多くは1遺構当りの出土量が少量で、貝種構成はセタシジミを主体とする淡水性種が大半を占める一方、ハマグリなど鹹水性・汽水性の資料も少量ながら含まれるという特徴がある。今回の資料はウミナ・タテヒダカワニナなど初出の資料が含まれるが、基本的にはそうした特徴と合致した内容を示すものであると考えられる。セタシジミの計測値については、MS7次やMS88-12次調査出土資料と近似しており、既存資料の計測値の範囲内におさまるものである。

b) 江戸時代以降の遺構

調査区西側で第2層下面にて落込みSX101を確認した。西から東に0.2~0.3m落込み、底面は凹凸が著しい。肩部から斜面にかけては踏込みと考えられる窪みも認められ、形状からウシの足跡と推定できるものもある。遺物は弥生土器のほかは確認できなかったが、近隣の調査成果や層相から江戸時代以降の耕作に伴うものであろう。

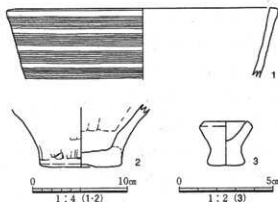


図6 SK201出土遺物

表1 SK201出土貝類一覧

綱名	種名	学名	数量
腹足綱 Gastropoda	ウミナ	<i>Batillaria multiformis</i> (Lischke)	1
	カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithideopsis) djadjariensis</i> (K. Martin)	4
	アカニシ	<i>Rapana thomasiensis</i> (Crosse)	1?
	バイ	<i>Babyronia japonica</i> (Reeve)	1
	クロダカワニナ	<i>Semisulcospira kurodai</i> Kajiyama et Habe	1
	タテヒダカワニナ	<i>Semisulcospira (Biwamelania) decipiens</i> (Westerlund)	1
	タニシ科	<i>Viviparidae</i> gen. et sp. indet.	3
二枚貝綱 Bivalvia	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)	1
	セタシジミ	<i>Corbicula sandai</i> Reinhardt	176(合1)

3) まとめ

今回の調査は極めて小規模であり、また、多くが攪乱で失われていたが、弥生時代の遺構を確認することができた。特に、食物残渣を廃棄した土壌の検出は当時の食料事情の一端を物語るものとして興味深い。また、ベースとなる第5層以下では第6層の堆積が水平でなく東に大きく下がっていることが注目される。小規模のため、全体の様相は明らかでないが、かつて水域であったところから陸地化していくという森小路遺跡の立地を考える上で、今後のデータの蓄積が待たれる。

参考文献

- 池田研2001、「森小路遺跡出土の動物遺存体」：大阪市文化財協会編「森小路遺跡発掘調査報告」I、pp. 201-207
大阪市文化財協会2001、「森小路遺跡発掘調査報告」I
紀平肇・松田征也・内山りゅう2003、「日本産淡水貝類図鑑 ①琵琶湖・淀川産の淡水貝類」ピーシーズ
吉良哲明1954、「原色日本貝類図鑑」保育社
波部忠重1961、「純原色日本貝類図鑑」保育社

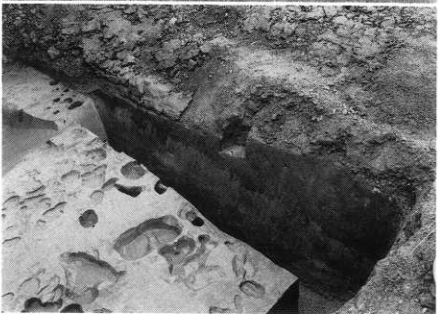
調査地全景(南から)



SK201(西から)



南壁断面(北から)



V 阿 倍 野 区

松崎町2丁目所在遺跡発掘調査(MZ04-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市阿倍野区松崎町2-74
- ・調査面積 約30㎡
- ・調査期間 平成16年5月24日～平成16年5月27日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美・杉本厚典

〈調査に至る経緯と経過〉

松崎町2丁目所在遺跡は、今年度、新たに発見された遺跡である。共同住宅建設に伴い平成16年5月13日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、調査地の南側の試掘壕において現地表下1.10～1.70mの所から、中世の遺物包含層が検出された。調査地の南西180mで行われたAB98-5・6次調査[大阪市文化財協会2001]では、古代～中世の阿倍寺およびその寺院に関連する遺構・遺物が見つかったことから、調査地およびその周辺で、古代～近世にかけての遺構・遺物が検出されることが予想され、本調査の実施となった。

調査地は庚申街道より140m東にあり、東へ下る斜面上に位置する。また、調査地の南側も緩やかに下っており、調査地から250m南にある常盤公園一帯が最も低い。この公園は戦前に瓦釜池と呼ばれた農業用の溜池を埋め立てて造園されたものである。

調査区は試掘の結果をふまえて、中世の包含層が厚く遺存する調査区南部に設定した。平成16年5月24日に重機で表土およびコンクリートの基礎を除去し、以下を人力により掘削した。分層して掘り下げながら各層に伴う遺物を捕集した。中世の作土層を2面調査し、26日に地山直上の遺構を掘り上げ、記録作成の後、27日に埋め戻しを行い、すべての調査を完了した。今回の調査では方位は磁北、水準値はTP値を使用した。



図1 調査地周辺図(1:5000)

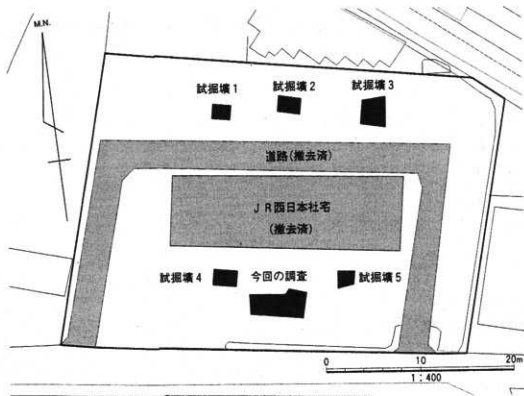


図2 調査区位置図(1:400)

〈調査の結果〉

1. 層序と遺物

(1) 層序(図3、図版一)

本調査の層序は以下のとおりである。

第0層：厚さが20cmの焼土を多く含む整地層である。焼土は戦災時のものとみられる。JRの社宅以前のもものとみられる建物のコンクリート基礎が、この整地層を掘り込んで設けられていた。

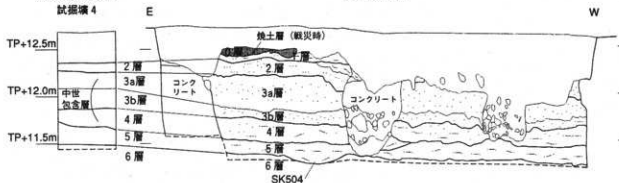
第1層：黒褐色(2.5Y3/2)細礫を含むシルト混り細粒砂層である。層厚は10cmであった。近世～近代の作土層であり、上面に畝の起伏が認められた。本層中から丹波焼とみられる植木鉢の一部が出土した(図6、1)。

第2層：ぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混り細粒砂層である。層厚は16cmで調査区の東部に分布していた。土師器皿(図5、2)や伊万里焼の細片が出土しており、近世の作土層と判断される。

第3a層：ぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混り細粒砂で構成された作土層である。層厚は40cmであり、調査区全体に認められた。本層中から瓦器皿(図6、3)、須恵器槽鉢(図6、4)が出土した。第3a～4層には土師器の他、瓦器椀・皿の細片が含まれており、第3b層とともに試掘調査で中世の遺物包含層とされているものに対比される。

第3b層：褐色(10YR4/4)細礫混り細粒砂で構成された作土層である。層厚は10cmであり、調査区の西側に分布していた。本層中から瓦器椀の細片(図6、5・6)が出土した。

第4層：褐色(10YR4/4)細礫を含む細粒砂混りシルトで構成された古土壌層である。層厚は20～



東壁断面図

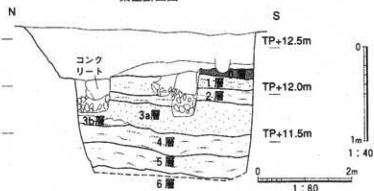


図2 地層断面図(縦1:40、横1:80)

表1 層序表

層所	様式	層厚	層相	層の種類	主な遺構・遺物
第0層		20cm		整地層	焼土は空襲時のもの
第1層		10cm	黒褐色(2.5Y3/2)細礫を含むシルト混り細粒砂	作土層	上面に敵の起伏、丹波焼
第2層		16cm	にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混り細粒砂	作土層	土師器皿・伊万里焼
第3a層		40cm	にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混り細粒砂	作土層	瓦器皿・須恵器撥鉢
第3b層		10cm	褐色(10YR4/4)細礫混り細粒砂	作土層	瓦器椀
第4層		20~30cm	褐色(10YR4/4)細礫を含む細粒砂混りシルト	古土壌層	
第5層		30cm	黄褐色(10YR5/6)細礫を含む細粒砂混りシルト	古土壌層	下面で小穴・土塊
第6層		10cm以上	にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混りシルト質粘土	地山層	

30cmであった。

第5層：黄褐色(10YR5/6)細礫を含む細粒砂混りシルト層である。層厚は30cmであり、調査区全体に分布していた。古土壌であり、下面で小穴や不定形の土塊を検出した。不定形の土塊SX505の埋土中からは土師器の細片が出土した。

第6層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混りシルト質粘土層である。地山層であり固くしまっていた。

(2)各層出土の遺物(図6)

第0層から1、第1層から2、第2層から3、第3a層から4~7がそれぞれ出土した。

1は植木鉢である。茶褐色の素地で、胎土には長石の粒が多く含まれており、口縁端部に透明釉を

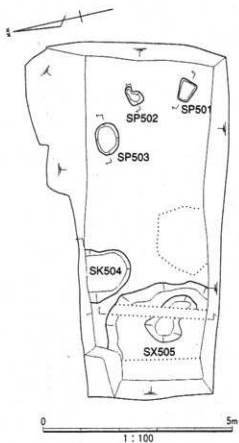


図4 第5層下面検出遺構平面図(1:100)

施す。口縁部に波状文、胴部外面に花形を印刻する。花卉の凹みに白泥を塗布し、粘土の小塊を貼り付けて花芯を表現している。白泥や印刻などの技法は19世紀以後の丹波焼に見られ、1もその可能性がある。2は口径10.4cmに復元される土師器皿で、器壁は5mmとやや厚手である。外面に指頭圧痕が認められるが、口縁部外面から内面にかけていねいなヨコナデを施す。16世紀後半から17世紀前半頃のものとして推測される。3は瓦器皿である。外面に指頭圧痕、内面に暗文風のミガキが認められる。口縁部は内外面ともいねいなヨコナデで整えており、13世紀後葉のものとしてみられる。4は須恵器播鉢である。口縁部をヨコナデで整えており、外面には透明釉が認められる。5は瓦器碗の口縁部である。内面には暗文と考えられる粗放なミガキが認められる。直立ぎみの口縁部に復元されることから12世紀頃のものとして推測される。6は瓦器碗底部である。貼り付け高台であり、高さ1mm、幅4mmと低平な形状を呈し、13世後中葉のものとして推測される。

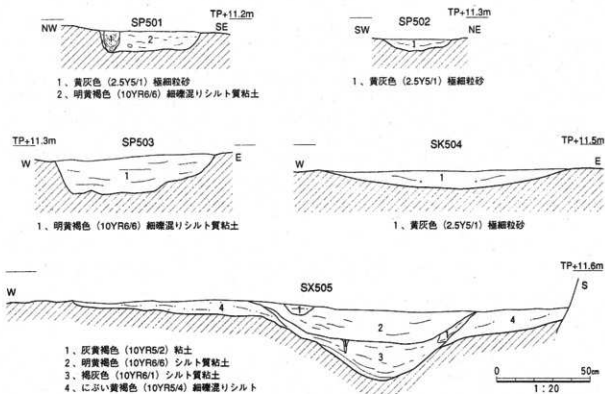


図5 第5層下面検出遺構断面図(1:20)

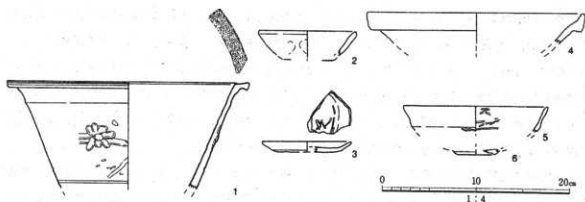


図6 出土遺物 第0層(1)、第1層(2)、第2層(3)、第3a層(4～7)

2. 遺構と遺物

第3b層下面、第4層下面、第5層下面で遺構検出を行ったが、前二者では遺構は検出されなかった。そのため、第5層下面で検出した中世以前の時期と推測される遺構について以下に述べる。

(1) 中世以前の遺構(図4・5、図版一)

第5層下面では3個の小穴と2基の土嚢を検出した。

SP501は一辺が30～50cmの台形を呈する深さ12cmのビットである。埋土は明黄褐色(10YR6/6)細礫混りシルト質粘土であった。掘形の西端部分において直径8cm、深さ10cmの灰褐色(2.5Y5/1)極細粒砂が遺存していた。これについて、ビット内の位置や形状から柱痕跡である可能性は否定できないが、他の木根と考えられる小穴の堆積物と岩相・色調ともに類似していることから、木根の一部と判断した。

SP502は長さ55cmの不定形の窪みである。埋土は明黄褐色(10YR6/6)細礫混りシルト質粘土であった。

SP503は長さ80cm、深さ20cmの楕円形の掘形のビットである。埋土は明黄褐色(10YR6/6)細礫混りシルト質粘土で、柱痕跡は確認できなかった。

SK504は長さ120cm以上、深さ6cmの不定形の土嚢である。埋土は明黄褐色(10YR6/6)細礫混りシルト質粘土であった。

SX505は長さ310cm以上、深さ38cmの不定形の落込みである。中央の窪みは粘土やシルト質粘土などで埋まっていた。この窪み内には木根の痕跡とみられる灰黄褐色(10YR5/2)のシルト質粘土が顕著であった。土嚢の西半から砂粒を多く含む土師器の細片が出土したが、図化できなかった。

〈まとめ〉

今回の調査では中世の厚い包含層と、地山直上で中世以前の小穴と土嚢を確認した。小穴の中には柱穴の可能性のあるものが1個認められたが、調査区内においてこれと組み合わせる柱穴を検出することはできず、柱筋の復元には至らなかった。

天王寺南門から堀越町の庚申堂を經由し田辺へと至る庚申街道沿いには、阿倍寺をはじめ古代・中

世の多くの遺構が分布していることが知られる。庚申街道そのものの名称は明治31年に付けられたものであるが〔三善貞司1986、pp.177-179〕、その成立は中世に遡ると推測される。その根拠の一つとなるのは、AB98-5・6次調査地で検出された寺域の北辺を画する溝SD01・02である。これらの溝は庚申街道の手前で直角に南へと曲がっており、街道に沿って南北に延びることが想定される〔大阪市文化財協会2001〕。溝の埋没は16世紀前半であることが示されており、これ以前に既に庚申街道の前身となる道が中世阿倍寺寺域の東側に延びていたと考えられる。

庚申信仰は室町～江戸時代にかけて盛んであり、庚申堂はその庚申信仰の発祥の地とされる。本調査地における遺構・遺物は必ずしも多いとは言えないが、調査地より西の庚申街道や阿倍寺推定地に近づくにつれて遺構・遺物の密度が高くなるものと推測される。阿倍寺の寺域の変遷やその周囲・沿道に拡がっていたであろう中世の街区の復元など、今後、松崎町2丁目所在遺跡を調査していくうえでの課題といえよう。

(参考文献)

大庭重信1999、「見えてきた幻の古代寺院」：『葦火』80号、pp.1-3

大阪市文化財協会2001、「第VII章 阿倍寺跡の調査 第1節 AB98-5・6次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告1998年度』、pp.51-60

三善貞司1986、『大阪史蹟辞典』清文堂出版株式会社

北壁断面
(南西から)



第5層下面検出遺構
全景
(西から)



SP501
(南西から)



VI 住 吉 区

遠里小野遺跡発掘調査（OR04-2）報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区遠里小野3丁目200-9
- ・調査面積 24㎡
- ・調査期間 平成16年11月1日～平成16年11月4日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、辻美紀

〈調査に至る経緯と経過〉

遠里小野遺跡は住吉区遠里小野と沢之町の西部に広がる、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。地形的には上町台地の南西端付近に位置し、北西側に向って標高が低くなっている。1930年代初めに行われた遺物の表探調査を契機に、遺跡として認識された遠里小野遺跡は、土錘や飯蛸壺などの漁具が豊富に出土するほか、古墳時代後期後葉の滑石製品の製作に関わる遺物、飛鳥時代から奈良時代の横列を伴う大型掘立柱建物が見つかったことで知られている。

今回の調査地は遠里小野遺跡の東部、山之内遺跡(YM)と隣接する地点に当る。周辺ではこれまでに、OR87-6・90-4、YM83-41・85-40・90-5・97-6次調査が行われ、古墳時代後期から飛鳥

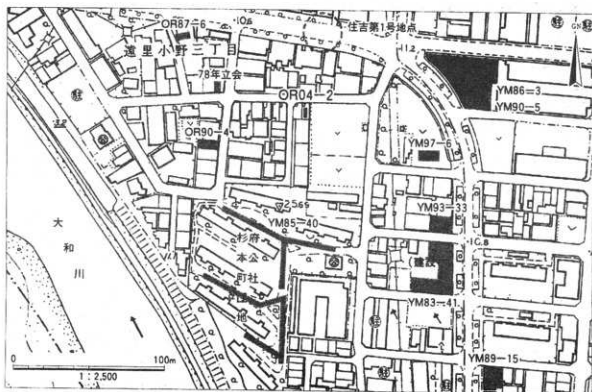


図1 今回の調査地と周辺の既往調査

時代の掘立柱建物や溝などが検出されている。当地で平成16年10月19日に実施された試掘調査でも、地表下約60cmで古代の須恵器を含む遺物包含層が確認され、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。作業はまず現代盛土を重機で掘削し、それ以下を人力で掘進め、随時、図面・写真による記録に努めた。なお、図面で示す水準値はT.P.値で、方位は磁北である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図2)

本調査地での層序は以下のとおりである。

第1層：現代盛土で、建物解体時に生じたものと思われる。層厚は約25cmである。

第2層：層厚が5～20cmの近現代の盛土で、地山(=第9層)の再堆積層である。

第3層：調査区外から運ばれてきた土で、調査区全域に分布し、土壌SK01～05の埋土でもある。褐～いり黄褐色シルト質中～粗粒砂からなり、層厚は約30cmである。短期間で形成されたと考えられるが、数単位(a～d)に分かれて堆積したようすが観察できた。肥前青磁碗・鉾滓が出土した。

第4層：SK06の埋土で、地山起源の礫を多く含む褐色粗粒砂からなる。最下部には水が溜まった痕が見られた。

第5層：砂礫混り褐色粘土質シルトで構成される中世の作土層で、調査区全体に分布する。層厚は約15cmで、特に北東側の窪みSX01に厚く堆積する。出土物には瓦器・須恵器・土師器がある。

第6層：SD01の埋土で、砂礫を多く含む黄褐色粘土質シルトからなる。

第7層：SP01の埋土である。黄褐色粘土質シルトで、砂礫をわずかに含む。

第8層：SD02の埋土で、調査区の北東端に分布する。地山の礫を多く含む黄褐色粘土質シルトからなる。

第9層：含砂礫黄褐色粘土質シルトの地山層である。上町台地の構成層で、調査区内ではTP+10.9m付近で検出される。

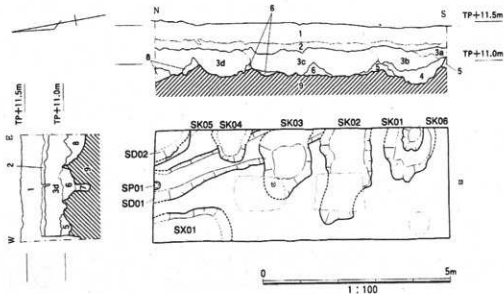


図2 北壁・東壁断面図ならびに検出遺構平面図

2. 遺構と遺物

1) 古代の遺構と遺物(図2・3)

古代の遺構としては、調査区の北東部で東側へ向う落ちと柱穴を確認した。落ちは南北に延びることから、溝の肩と判断しSD02と呼称した。SD02の埋土からは土師器の甕1、須恵器の杯H身2・3・甕4・瓶の口縁部5が出土した。2・3はそれぞれTK209・TK217型式に相当し、残りの遺物も時間的に相前後するものと思われる。

SP01はSD02の西側、北壁際に検出した柱穴である。平面形は直径が約0.2mの円形で、残存する深さは0.2m強である。埋土からは土師器の小片が出土しただけで、詳細な時期は不明である。

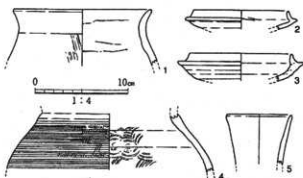


図3 SD02出土遺物実測図

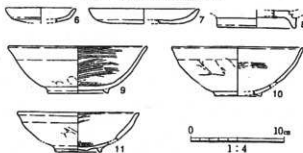


図4 SD01出土遺物実測図

2) 中世の遺構と遺物(図2・4)

SD02の西側で南北方向の浅い溝SD01を検出した。幅は約0.9mで、深さは最も深い部分で約0.2mである。下面でわずかに踏込みを確認した。埋土の中からは、土師器の皿6・7と碗8、瓦器碗9~11が出土した。年代はいずれも12世紀の中で納まるものとする。

そのほか、中世の遺構としてはSK06とSX01がある。埋土の様相から判断すると、前者は水溜りとして使われた可能性が考えられる。後者は耕作に伴うものと思われるが、下面に耕作痕は見当たらなかった。いずれの遺構からも平安時代末から鎌倉時代初めの瓦器や土師器の破片が出土した。

3) 近世の遺構と遺物

調査区の東部において、南北に規則的に並ぶ長円形の土壌SK01~05を第3層下面で検出した。幅は1.2m前後で、深さも約0.3mで規格に富む。また、第3層の堆積状況から考えても、これらの土壌はおそらく一連の作業によって掘削されたものと思われる。形状からは土取穴の可能性が高いと思われるが、地山に到達していないことから、土壌の改良を目的としたのかもしれない。

〈まとめ〉

今回の調査では古代から近世までの遺構を検出し、これまでの調査成果を補強するような材料を得ることができた。古代には本調査地にも居住域が広がっていたと考えられるが、周辺の状況と比較すると遺構の密度がやや希薄であるように思われた。当初、中世作土による削平の可能性も考えたが、地山の高さは周辺とほとんど差がなく、また、柱穴の深さを鑑みても大規模な掘削が行われたとは考え難いため、元来空地として機能していたのであろう。中世以降は基本的に生産域として利用されたと判断される。



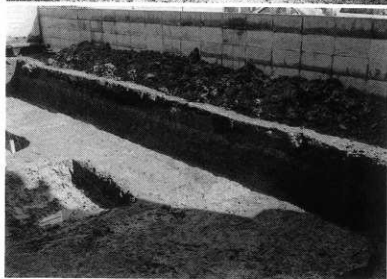
調査地遠景
(南東から)



調査区完掘状況
(北から)



東壁断面
(南西から)



帝塚山東遺跡発掘調査（TE04-2）報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区帝塚山東1丁目23-1・3
- ・調査面積 278㎡
- ・調査期間 平成16年12月25日～平成17年1月17日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 田中清美、松尾信裕

〈遺跡の位置と地形的歴史的環境〉

調査地は大阪市南部の住吉区に所在し、大阪市中心を南北に延びる上町台地の基部付近に位置している（図1）。この付近の上町台地の西端は調査地より西約700m付近にある比高約10mの急崖となっており、東端は東側の河内平野に向かって緩やかな斜面となっている。本遺跡が広がる一帯は標高がTP+12～14mで、南に向かっても緩やかに低くなっている。

この地域を明治20年の地形図で概観すると、上町台地の脊梁線に沿った方向の道路や土地利用が見て取れる（図2）。高燥な台地であったため、この一帯ではその地形に沿った方位の土地開発となったようである。また、その地形図を見ると本遺跡は上町台地の頂部ではなく、万代池が築かれている開析谷に向かって東に低くなる緩斜面部に位置し、台地の最高部は本遺跡の西側にある。

本遺跡の西約500mには大阪市内でも数少ない前方後円墳で、国指定史跡である帝塚山古墳があり、南には二本松古墳や弁天塚古墳などが存在している（図3）。北部の阿倍野区にも聖天山古墳や丸山古墳などが分布している。また、本遺跡一帯にはこれら以外にすでに消滅した古墳があったのではないかと推定できる小字名がいくつかあり、上町台地南部のこの一帯には数多くの古墳が築かれていたのではないかと想定されている。さらに、近世期の絵図類にも塚を图示したものがいくつかあり、この一帯には近世段階までは多くの古墳が存在していたのであろう【上田宏範1988】。こうした古墳の存在は、この地域が周囲より高くなった台地であり、その築造に適したところであったと推定できよう。

また、本遺跡内を南北に縦貫する道路は熊野街道を継承したものとわれ、大阪市北部の「渡辺津」

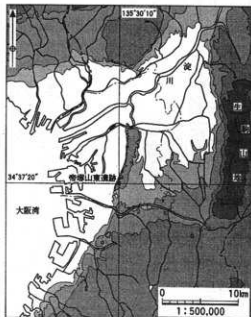


図1 帝塚山東遺跡の位置



図2 調査地の位置(明治20年製版複製二万分の一地形図を転載、一部加筆)



図3 調査地の位置(大阪市文化財地図を転載、一部加筆)

から住吉大社・堺を経て紀州熊野への主要街道であった。熊野詣は平安時代後期から京都の貴顕達によって始まったが、鎌倉時代に勃発した承久の変以後は貴顕達の参詣は途絶し、代わって一般庶民に熊野信仰が広がり、鎌倉時代になると「蟻の熊野詣」と言われた如く多くの人々が参詣するようになった。その際に通って行ったのが熊野街道である。本遺跡の北約1.1kmにはその王子跡の一つとされる阿倍王子神社もあり、往来する参詣者で賑わっていたのであろう。

本遺跡南部に広がる住吉区内の遺跡の消長をみると、住吉大社境内遺跡や住吉行宮跡などでは7世紀代を中心とする古代の発展期があり、その後衰退するが、12世紀代から再び活動が活発になるといふ指摘がある【村元健一2004】。熊野詣をきっかけに熊野街道と住吉大社を中心にしたその周辺部が活性化したという。本遺跡周辺の再開発の画期がこの時期にあると考えられる。

〈調査に至る経緯と経過〉

駐車場となっていた本敷地で共同住宅の開発計画があがったため、平成16年11月16日に試掘調査を行うことになった。試掘調査は敷地内の8箇所で行ったが、南部の3箇所では現代の攪乱によって大きく地層が削り取られていた。中央部の2箇所では駐車場のアスファルトとその碎石の下位に、須恵器や埴輪を含む落込みが見つかった。また、北部の3箇所ではアスファルトと碎石の直下に洪積層の地山が確認された。

この結果を踏まえ、遺物を含む落込みが検出された中央2箇所の試掘トレンチを含む形で、東西約25m、南北4mのトレンチを設定し、試掘調査で検出した落込みの規模と性格を把握するための調査を行った。

その結果、試掘調査で中央2箇所に設定したトレンチに検出された落込みは、一連の溝であることがわかり、トレンチに沿って蛇行するように幅約4mの溝が検出された。この溝からは多数の埴輪と須恵器が出土しており、それらの出土位置から溝の南側から供給されたように観察できた。そのため、南方に7m拡張し、遺物が本来あった位置の確認と溝の性格を把握することに努めた。

拡張の結果、溝の南肩が東部では弧を描くように見つかると、西部では弧状の溝から北西方向へ3m直線的に延び、その地点から南西方向へと屈曲しており、この溝が前方後円墳の周濠であることが判明した。

さらに、後円部の先端を確認すべく東南部を3m東に拡張した。拡張した部分で後円部の先端は確認できたが、南部では敷地の東西幅一杯に広がるとも考えられる大規模な攪乱によって古墳の南半が削平されていることが判明した。最終的に東西約26m、南北11mのトレンチとなったが、その範囲内でここに遺存していた古墳の全形を把握することができた。

墳丘部分は全域が洪積層の地山まで削平されており、墳丘を構成する盛土はまったく存在していなかった。また、主体部も検出できなかった。

遺物は前方後円墳のくびれ部付近の周濠で集中して出土しており、それ以外での出土量は少なかった。

なお、図で使用した座標値は世界測地系に基づいたもので、水準値はT.P.値（東京湾平均海水面値）

を用い、本文・挿図では「TP+〇m」と表記した。

〈調査の結果〉

1. 層序

墳丘部分は全域が洪積層の地山まで削平されており、墳丘を構成する盛土はまったく存在していなかったが、くびれ部付近の周濠には遺物を含む地層が5層堆積していた(図4)。それらは、出土する遺物の年代観や層相から考えて大きく2層に分けることができた。また、前方部の狭くなった周濠でも遺物が出土したが、そこでは周濠が浅く、大きく2層に分れる地層が堆積していた(図5)。

第0層 駐車場として活用されていた際のアスファルトとその直下の碎石である。

第1層 礫を含む褐色粘土質シルト層である。磨滅した埴輪が多く出土するが、少量の瓦器碗が出土する。

第2層 灰褐色シルト質細粒砂層で、埴輪や須恵器のほか、瓦片が出土した。

第3層 灰褐色シルト質粘土で、水成層である。埴輪や須恵器が含まれていた。

第4層 暗褐色砂質シルト層で、暗色帯となっている。多くの埴輪や須恵器が出土した。

第5層 黄褐色礫混り中～細粒砂層である。遺物は含まれていない。

これらの層は遺物や堆積状況から判断して、第1・2層が瓦器や瓦が含まれることから、鎌倉時代以降の地層であると考えられる。この時期以降に古墳が削平されたのであろう。住吉一帯の再開発の時期と符合しており、この一帯で耕作地が拡大して行く過程でこの古墳も削平された可能性がある。

また、第3層が水成層であることから、第4層が堆積して以降、しばらくは放置されたような環境にあったと推定される。また、埴輪や須恵器を多く含む第4層が古墳造営以降の堆積層で、第5層が古墳造営直後の堆積層であると考えられる。埋土は第3層を挟んで上位の第1・2層と第4・5層とに大きく区分できる。

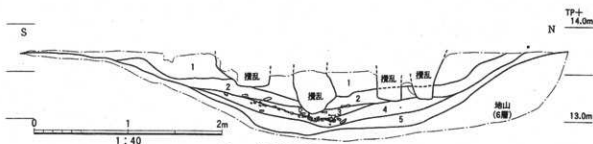


図4 後円部周濠内の堆積状況

2. 遺構と遺物

遺構

調査範囲全域に前方後円形の古墳と、調査範囲の西端に土壌SK01が検出された(図6)。

古墳 南東部に後円部を、北西部に前方部をもつ前方後円形

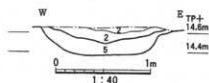


図5 前方部周濠内の堆積状況

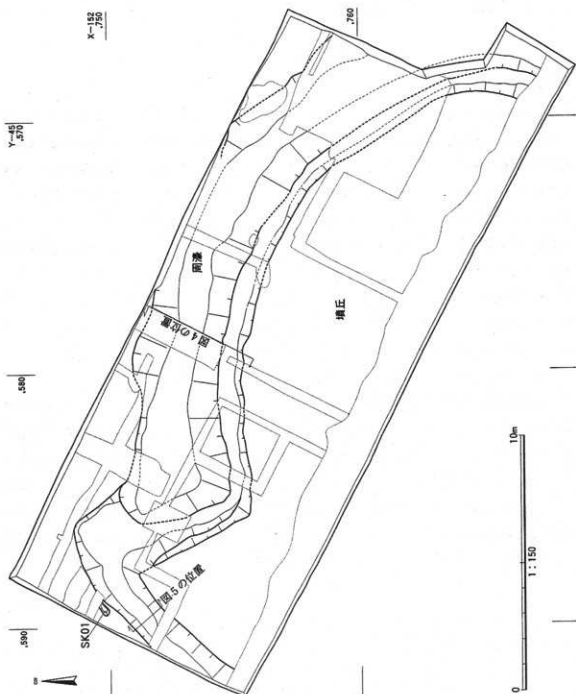


図6 遺構配置図

の古墳で、調査ではその北半部を検出した。調査範囲の南部はすべて現代の攪乱によって削平されている。

主軸は前方部の西端に直交すると想定でき、北西から南東方向に傾いていることがわかる。後円部径は周濠内の下端の直径が約29.1mとなる。前方部はくびれ部からの長さが約5.8mで、先端部幅は前方部西端が直線になるように折り返して復元した結果、約16.7mと復元できた。後円部の直径と比較すると、前方部の長さが短く、帆立貝形の前方後円墳と呼ぶのがふさわしい(図7)。墳丘下端で計測した主軸方向の長さは約32.4mと推定される。

周濠は後円部では最大幅4.1m、最大深さ0.9mと規模が大きいが、前方部では幅1.3m、深さ0.3m

と規模が小さくなる。後円部の東端では墳丘側の肩しか検出できず、その幅は確認できなかった。幅が確認できたのは後円部の北側で、溝の形状は墳丘部から小さな屈曲を持ちながら2段になって底面へと続いている。底面の幅は約1.7mで、平坦になっている。後円部からくびれ部を過ぎ、前方部となる位置で溝が浅く、幅も狭くなり、埋土も第2層と第5層しか堆積していない。

SK01 古墳の前方部周濠のすぐ西で検出した。長軸0.5m、短軸0.3m、深さが0.1m遺存した小規模な土壌で、内部から横位に埋設した円筒埴輪5が出土した(図8)。

遺物

古墳周濠内から出土した遺物は埴輪と須

恵器がある。埴輪には円筒埴輪のほか、人物埴輪や盾形埴輪・衣蓋形埴輪などが確認できた。今回は、埴輪では円筒埴輪・朝顔形埴輪・衣蓋形埴輪を、須恵器では短脚有蓋高杯・甕を報告し(図9)、古墳の年代を考える。

1~5は円筒埴輪で、体部外面には縦方向の粗いハケを施し、断面が台形状の低いタガが巡っている。内面は、1は土師質の埴輪で橙色を呈し、焼成は良好である。内面にはユビナアの跡があるが、2~4も土師質の埴輪で、色調は橙色を呈している。焼成は良好である。内面にはユビオサエしか認められない。2・4には円形のスカシ孔がある。5はSK01から出土した土師質の埴輪で、上端部の直径が26cmを測り、円形のスカシ孔がある。

外面には横方向のハケメが施されている。1~4に比べ、色調はやや淡い橙色を呈しており、混和材が少なく、器壁が薄い。

6は土師質の朝顔形埴輪の口縁部で、黄橙色を呈しており、焼成は良好である。口径が40cmを測る。外面と内面には横方向のハケメが施される。7は土師質に焼成された黄橙色を呈する衣蓋形埴輪の蓋の端部で、直径は48cmである。端部近くを強くナアており、端部は肥厚する。横方向のハケメが施され、蓋上部に沈線が巡る。

8は須恵器の短脚有蓋高杯で、口縁部や受部は欠損しており、詳細な時期は不明であるが、杯部下半の約1/2をヘラズリする。脚部には刀子の刃状の道具で外側から刺突した透し孔が5箇所あり、端部は上下に拡張している。5世紀末~6世紀初頭のTK23あるいはTK47型式に属する。9は須恵器甕の口縁部破片である。口縁部は拡張しており、上端は内湾し、外方下端部は突線が巡る。頭部外面

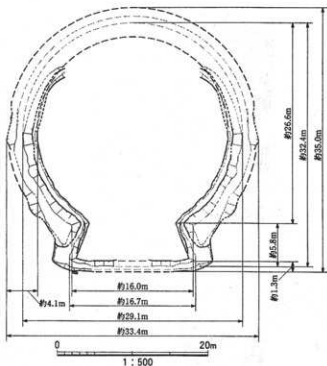


図7 古墳復元図

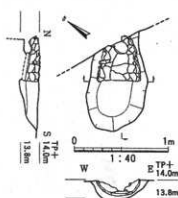


図8 SK01平・断面図

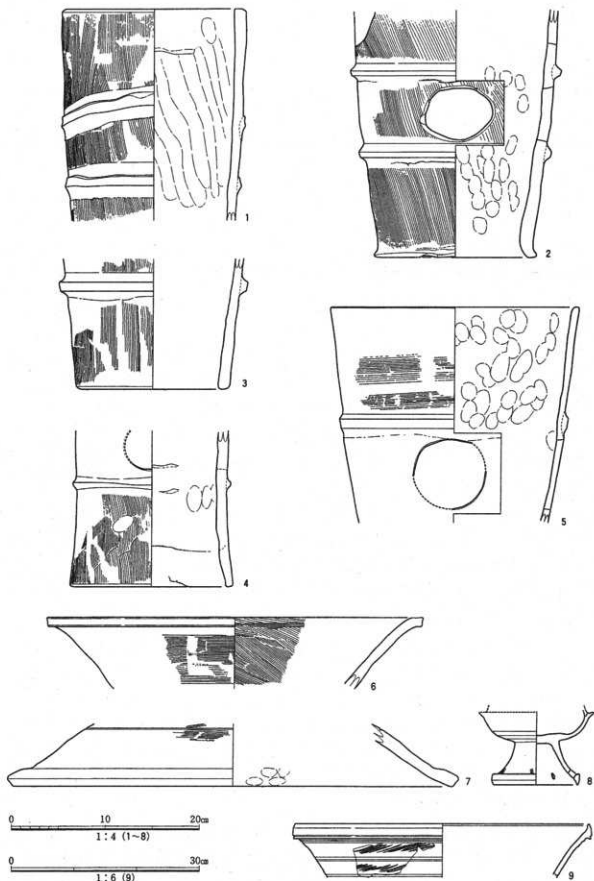


图9 出土遗物实测图

には3段に沈線文帯を巡らせ、沈線文帯の間に列点文が施されている。内面は全体にカキメ調整を施している。6世紀代に属するものであろう。

これら以外にも土師質焼成の衣蓋形埴輪の蓋部中央付近の破片や、立ち飾り部の破片や輪部、人物埴輪の手や頭部と推定できる破片、須恵質に焼成された円筒埴輪の破片が出土している。

これらの埴輪は川西編年【川西宏幸1978】のV期に相当し、5世紀末から6世紀代に属する一群である。

また、同時に出土している須恵器には、5世紀代末～6世紀代初頭に位置するTK23～TK47型式の短脚有蓋高杯や甕、6世紀代に属すると考える頸部に列点文を施す甕の口縁部が出土している。

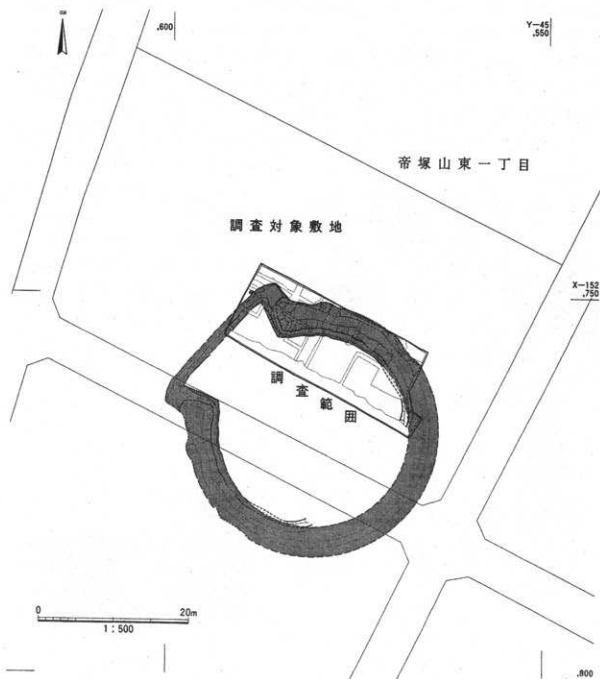


図10 調査地および周辺街区における古墳の位置復元図

〈まとめ〉

本調査は上町台地上で初めて埋没した古墳を発見したことが、特筆できる成果であろう。

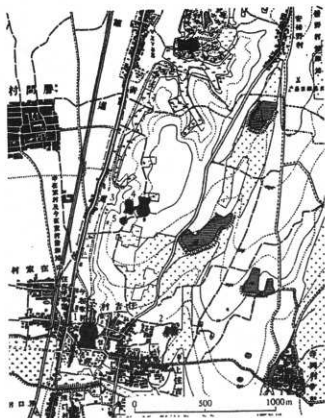
新発見の古墳は全長約30mと、その規模は現存する帝塚山古墳を越えるものではないが、帆立貝形の前方後円墳であり、帝塚山古墳を造営したこの地域の有力氏族によって造営されたものであると考えることは可能である。

調査で検出した古墳の復元図では、古墳の位置が敷地の南部と南側の道路、さらには南側の街区にも広がるようになる(図10)。この調査地に隣接する道路や街区は、1927(昭和2)年からの区画整理事業によって本敷地より1m以上も低く削平されており、調査範囲より南に古墳の墳丘部が残っているとは考えにくい。現状では本敷地と北側敷地の西半分が高く残っている土地である。本敷地の地表面より0.2mで地山が検出され、それより約1mの周濠が存在していたが、そうした検出状況から判断して、本敷地と北側敷地を除いて、隣接する街区では地山が1m程度の削平を被っていると考えられる。ただ、明治時代の地形図を見ると、本調査地周辺は東側に低くなる地形であり、本調査地より東では削平された地層が薄いとも考えられ、遺構が残存している可能性もある。

これまでも本遺跡が所在する台地上一帯には国史跡の帝塚山古墳が存在していることや、字名や地

籍図などから幾つかの古墳が存在していたことが想定され、「住吉古墳群」として位置づけられていた(図11) [上田1988]。

「住吉古墳群」には現存する帝塚山古墳以外に、その東側には消滅した「大帝塚古墳」や南側にも「小帝塚古墳」が地籍図などを元に復元されている。さらには住吉大社の北部にも消滅した「住吉古墳」を想定している。これら以外に、本遺跡より1km南には古墳と考えられる「弁天塚」があり、現在でも小高い丘として残っている。また、1911(明治44)年に土砂採取工事で



1. 住吉古墳 2. 弁天塚 3. 帝塚山古墳 4. 大帝塚古墳跡
5. 小帝塚古墳跡 25分の「大阪中部」明治18年、陸地測量所

図11 住吉大社付近の古墳群
『新修大阪市史』第1巻より転載

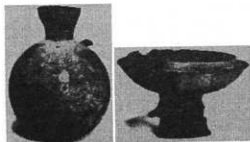


写真1 二本松古墳出土須恵器
『新修大阪市史』第1巻より転載

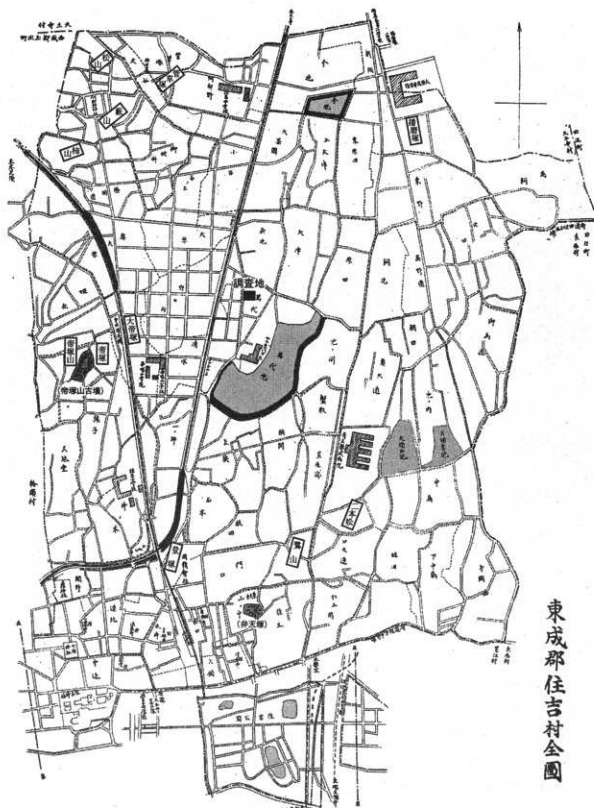


図12 『住吉村誌』にみられる「塚」・「山」が付く字名の分布と今回の調査地の位置

消滅した「二本松古墳」もあり、明治時代の地籍図【住吉常盤会1927】でも塚や山が付く字名が確認していることなどから、住吉大社東方の台地上にはいくつもの古墳が存在していたと想定できる（図12）。今回の古墳の発見は、そうした想定を裏付けられるもので、上町台地の平坦部が古墳の造営地とし



図13 帝塚山古墳と今回の調査地の位置

て利用されていたのであろう。

その造営時期については、本古墳の造営時期は出土した埴輪や須恵器（TK23～TK47型式）の年代観から5世紀後半から6世紀初頭といえる。本古墳の西にある帝塚山古墳の年代は5世紀前半～中頃と言われており【岸本直文他2001】、この地域の古墳群は5世紀代以降に造営が開始されている。この古墳群には年代が判明する古墳がもう1基ある。二本松古墳である。その出土遺物には6世紀後半の須恵器高杯や提振があり（写真1）【上田1988】、この古墳群の造営時期がその時期まで継続している事が考えられる。

本古墳は現存する帝塚山古墳から東に約500m離れている（図13）。両者の間が明治時代の地形図では最も高い平坦面である。この場所は1910年代後半に住宅地となった地域で、その開発工事の際に大きく地形が改変されており、明治時代の地形図の面影は皆無である。この地域の地籍図の検討から、「大帝塚古墳」が復元されているが、それ以外でも地籍図に残らなかった古墳が存在していたと

推測することは、今回のように新発見の古墳があることから考えると、十分可能である。最初に述べたように、この地域の地籍図を見ると、小字名に塚名や山が付くものが多く見つかる(図12)。伝承でも小字新聞に「小町塚」があったという。

また、この地域の再開発についての新たな傍証を得ることができた。第1・2層から出土した瓦器や瓦がその時期を示すものである。先にも述べたが、古代以降の住吉一帯の再開発は鎌倉時代に求められていた[村元2004]が、今回の調査でも同様の時期に本古墳が削平されていると考えられる。

ただ、その削平は墳丘全体を削平したものではなく、墳丘の一部が塚状の高まりとなって残存していたと推測される。そう考える根拠として、この敷地が現在でも隣接街区の中で小高く残っていることによる。本敷地は1910年代の住宅地開発では対象地ではなかったが、その後の1927年からの区画整理事業では対象地の中に含まれている。その際に隣接地は大きく削平されてしまったのであるが、この敷地だけが隣接地と同様の削平を受けておらず、西側の旧熊野街道よりも一段高く残っているのである。1927年からの区画整理段階でも、この敷地が一定程度高まりとなって残っていたため、隣接地と同じように削平されず、平坦にされただけで住宅地となったのではなかろうか。

今回の調査で発見した古墳は、調査を行った敷地が「萬代」と呼称される小字であることにちなんで、「^{まんごう}万代古墳」と呼称することにする。

参考文献

- 上田宏範1988、「大阪市域の古墳」：『新修大阪市史』第1巻、大阪市、pp.351-424
川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64号第2号 日本考古学会、pp.95-164
岸本直文・江角啓・向田一成・森オリ江・金谷健一・奥村宏美2001、「大阪市帝塚山古墳の測量調査」：『市大日本史』第4号 大阪市立大学日本史学会、pp.122-145
住吉常磐会1927、「東成郡住吉村全図」：『住吉村誌』
村元健一2004、「莊嚴浄土寺の歴史と周辺遺跡の消長」：大阪市文化財協会編『莊嚴浄土寺境内遺跡発掘調査報告』、pp.75-96

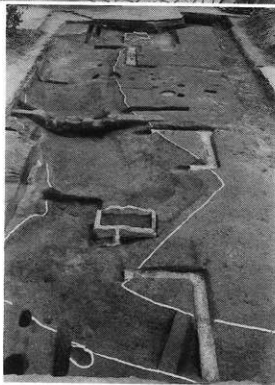
調査地遠景
(北西から)



古墳検出状況(1)
(西から)



古墳検出状況(2)
(北西から)



平成16年度 大阪市内埋蔵文化財

包蔵地発掘調査報告書

発行日 平成17年6月1日

発行 大阪市教育委員会
助 大阪市文化財協会

編集 大阪市教育委員会文化財保護課
(大阪市北区中之島1-3-20)

印刷 和泉出版印刷株式会社
